

---

# サイクロプス

NEO,s

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サイクロプス

### 【Nコード】

N4068D

### 【作者名】

NEO's

### 【あらすじ】

サイクロプス、それは自衛軍が極秘裏に開発した遠隔操作ロボットの事である。ある日、自衛軍は徴兵を開始した、対象者は大学・短大・専門に在学中の学生全員であり、正道真一もその中の一人であった。やがてサイクロプスは彼らを巻き込み動き出す

## くプロローグ（修正1）く

窓際の席

快晴がささげる木漏れ日

窓から入り込む陽光

1面を白で塗られた建物の中で還暦を過ぎた女性は赤い電話を片手にある男性と

話をしていた

その声色からは切羽詰っている状況がうかがえた

「先日国防長官の案件は受け入れてくれるのかしら？」

その女性、キアリー・ヒューストンはアメリカの情勢を支える1人で支える

歴代屈指の凄腕大統領になるはずだったのだが

彼が選挙で当選して直ぐの事、アメリカはイランへの空爆を開始

それに伴い沈静化を見せていた中東情勢はさらに悪化

原油価格の高騰により、アメリカの金融情勢に追い打ちをかけ三流国家への道を徐々に進む形となった

そんな中、国防長官が大統領へとある言葉をかける

「このさい世界を手に入れませんか？ いい案があるのです」

彼が大統領へと話を進めたのは即位後2カ月の話であった

「そんな事が可能なのかしら？」

「ええ、可能です」

国防長官の断定的な口調に心が折れた大統領は環境保持という名目で極秘裏に或兵器の製作許可を与えた

その後兵器の案件を日本の防衛大臣と吟味した結果今現在開発に至

っている

「ええ、何とか受け入れられそうです、それです。ね。資金援助の件は準備できているのでしょうか」

「心配しなくても大丈夫よ。あなたの国が事を起こしたとしても3年は耐えられるだけの資金は用意してあるわ」

「そうですか、3年で事を進めなくてはいけませんな」

「ええ期待しているわ」

## チャプター1「仮想戦争」

ふと気がつくと、俺は戦火の中にいた

「爆発するぞ！！」

鳴り止まぬ轟音、耳元を吹き抜けていく銃弾

まさに不快と言っしかない現状の真っただ中に今俺はいる

第二次世界大戦が終了して、世界は一時的な平和を手に入れた

だが、それは一時的な平和とっていいだろう

大戦以降も戦争は各地で勃発し、絶える事のない民族紛争は今でも続いている

そんな中、遂にアメリカが戦争の火種を落とした

そう、みんなの記憶に新しい「イラン空爆」である

空爆以降、世界の情勢は乱れ原油の値段は高騰し、混沌とした世界情勢はついに

第三次世界大戦を引き起こした

ロシア、中国を代表とする連軍、新世界連合軍は、アジア全土を一瞬にして飲み込み  
領土を拡大していた

一方

アメリカ、EUを代表とする連軍、国際連盟軍は、新世界連合の数で圧倒する戦略に苦戦していた

この頃の日本といえば酷いものだ  
防戦虚しく、新世界連合の植民地と化していたのだから

元々の軍事力はあるのに、同盟国、アメリカとの距離や、中国の軍事力の増大に対処しきれなかったらしい

そんな中、俺は戦場に立っている  
しかも中国の大都市内  
既にここも廃墟と化してしまった

そんな俺達の任務はと言うと新世界連合軍の拠点衛星施設まで行き施設を爆破するミッションらしい

今俺は傭兵だ！！

俺の隣にいる傭兵仲間は誰とも、何処の国出身なのかも解らない  
そして

一人、また一人、仲間がやられていく  
「伏せる！！」

隊長の掛け声で隊が動く  
そんな隊長の掛け声を聞いて  
一斉にみんな伏せるのだが  
そんな中、身を伏せずに撃ち続ける奴  
ター  
ン

案の定そいつは狙撃された

「バカが無駄死にしゃがつて」  
思わず口にしてしまう一言

「仕方ないさ、今は戦争中、目的の達成だけを考える」  
隊長は冷静だった

「それよりもヤバイな、このままだとみんな狙撃されちまう」

さつき狙撃された兵士を見て隊長がいう

「道の選択を間違ったか、その角を左に入ってビルの隙間に入る、みんな着いて来い！！」

ここは広い大通り、大きなビルが建ち並ぶ繁華街だ

調度、その中心あたりにあるバリケードを盾にして銃撃戦をしている  
そんな中、調和を乱して射撃を続けていた兵士の一人が敵軍のスナイパーに狙撃された

そこで隊長は中央突破の作戦を急遽変更して

ビルの路地を縫って通り、隣の大通りへ行く作戦へと変更したのだ  
作戦を変更しても戦況はたぶん変わらないだろう

俺達は隊長の後を追うように路地へと入って行った

そんな俺達を見て敵軍も隣の通路へと移動する

どうやら先に路地を抜けて待ち伏せする作戦らしい

路地を半分くらい進んだ時だろうか

先頭を進む隊長が急に止った

「おーし、止まれ、引き返すぞ！」

隊長の一言で隊が動く

先頭は入れ替わり

路地を引き返す

俺達の隊は圧倒的に不利な状況だった

敵軍の数はこちらの5倍はあるだろう

爆破ミッションであるがゆえに

大人数で押し寄せて行くなど考えられない状況なのだ

そんな状況の中、小隊が敵の中部隊に発見されてしまった  
まず正面から行けば勝ち目はないだろう

戦争とはそういうものだ

英雄などいない

数がいつも物をいう世界なのだから

路地を引き返す小隊

少し前に居た通りまで引き返す

路地から少し覗いてみると

案の定敵は分散していた

「守りの兵士は2人だけか」

こちらの残りの兵隊は5名といった所

正面から行けば数で勝てるはずだ

そんな事を考えていた時だ

手前にいた兵士の一人が敵へと手榴弾を投げて牽制を仕掛ける

その瞬間脳裏に衝撃が走った

隊長も同じ事を考えていたらしい

「不味い事をやってくれたな、あれじゃー分散していた兵士が音  
に気が付いて戻ってきてしまう」

隊長と俺はすでに路地へと逃げ込んでいた

先ほどの大通りから銃声が激しく聞こえる

前衛の3人は今も大通りで戦っているだろう

数秒後の後、手榴弾の爆発音を聞いた

果してあの状況下で何人が生き残っているのだろうか？



そんな事を考えている内に、路地から反対側の大通りへと抜ける  
先頭にいたのは隊長だ、隊長が先に路地へと足を踏み出した瞬間だ  
ったか

スナイパーライフルの甲高い銃声を聞いた

ター  
ン

それを後ろから見た俺は動く事が出来なかった

次は俺の番なのか

結局こんな作戦無理だったじゃないか  
いろんな事が脳裏を過った

数秒の後、大通りから現れた敵兵は何も言わず  
最後に見た光景は俺にライフルを向ける敵兵士の姿だった  
程なくして

俺は甲高い音を聞いた、、、。

一瞬だろうか

目の前が真っ暗になった

少しの間の後

仲間を上空から見つめる事が出来た

キーボードの「Tab」を押すと

今残っている兵士の人数を確認する事ができるようだ

どうやら手榴弾を投げた組が敵の裏取りに成功したみたいだ

ディスプレイの左下にチャットが表示されていた

ID

島根の隊長「惜しかったね（・3・）b」

Ore 「まあ次がありますからねw」

島根の隊長「敵のスナイパーが優秀でさー」

ボルボ 「w」 最初に撃たれた奴

鷹の爪 「うわーっーん」 分散した時に味方の手榴弾をくらった奴

敗者のチャット場が荒れる前にアナウンスが流れた

「レッドチームの勝利！！」 爆破側

どうやら勝負がついたみたいだ

キール 「プゲラ」 敵のスナイパー

Kouji様が入室しました

Kouji 「んっごいもぢいいいいいwww」

Kouji様が退出しました

Kouji様が入室しました

島根の隊長「（・A・）」

Kouji 「お前ら弱すぎwww」

島根の隊長「厨乙w」

Kouji 「（・ー・）」

そう、これは現実の話ではない  
ゲームジャンル

FPSというネットゲームの話だ

決して現実ではない

3年前の話だったと思う

アメリカがイランを空爆した

その事実は今でも世界に波紋を呼んでいる

そしてその事実をゲーム会社が取り上げて、10年後の世界を舞台にしたゲームを作成した

そんなFPSにも色々あるが

今俺がやっているゲームが一番人気だ！！

さてもう一勝負しようか！！

## チャプター2「日常」

「はあ、ゝ。」

無機質な溜息が流れる

俺は、東京の短大に通う短大生だ

実家から離れて学校の寮で一人暮らしをしている

今はというと、先ほどのゲームを切り上げて

今晚の晩飯の材料を買う為に近くのスーパーに来ている所だ

アメリカのイラン空爆以降、世界情勢はかなり混沌としていて

表向きは核軍事施設への先制攻撃という主張も、前回のイラク戦争での前科があるため

世界はアメリカを行動を冷ややかな目で見る負えなくなった

だからといって世界戦争なんか起きるわけがない

愚かな過ちを世界が繰り返すとは到底思えない

空爆以降、日常生活も実感できる範囲で少しか変わった

原油価格が高騰して、1バレル110ドルを更新

リッターあたりの単価は180円を超えるまでになった

今も少しづつ原油価格は値上がりしている

そのせいで以前まで身近に使っていたガソリンがいきなり高級品になった

ガソリンがまだ普通に使えた時代

少し高くなって思えた時代だけ

俺は寮から学校まで原付で通っていたのに

今は歩きだ

原付でも月々のガソリン代が結構な額になる御時世

一人暮らしには堪えるので節約をしなくてはなるまい

このさい贅沢はいつてられない  
むしろ生活が成り立たなくなる

そんな事を考えながら俺はズボンのポケットから煙草とzippro  
を取り出した

カチン ジュツ ボツ

煙草を吸い始める

正直、煙草を止めるか、原付を捨てるか迷う所だったけど  
やっぱり原付を捨ててしまった

まあいいさ、ガソリンなんてその内安くなるんだからさっ、、、。

そういえば最近やたら電気自動車のCMを見るようになったっけ  
今考えるとそんな背景があっただんな

流石に今のままでは不味いと思ったのだろう

世界の大手自動車メーカーを始めとする、自動車会社各社は電気自  
動の生産をこぞって開始した

価格も今のガソリン自動車の2割増しくらいだ

最初の内は電気駆動を7割、補助用のガソリン駆動を3割というハ  
イブリッド方式のシステムで推移するのだという

気になる電気スタンドだが、車購入時に駐車場に設置され

充電時間は約6時間

満タンでだいたい100kmを走行する事ができるのだという

長距離利用の場合以外だったら現状のシステムでも十分実用できるのだろうが

やっぱりガソリンへの拘りは捨てがたい

スーパーからの帰り道、良く通る踏切り

カン カン カン カン カン

踏切の閉まる音で足を止める

良くこの踏切には足を止められる事がある

東京都内の踏切はまさに地獄だ！！

なんたつて電車の本数が多いのだから

踏切の閉まる回数もちろん多い

よって、一般の通行人は不本意ながら足止めを食らうのだ

最近では電車の利用客も増えた、ガソリン系の運搬システムが減退してきたからなのか

環境問題のせいなのか、特に自動車は最近の若者に受けが悪い

自動車を利用する人よりも電車を利用する人の数が圧倒的に多いのだ

自動車は渋滞があるが、電車なら確実な時間に目的地につけるとい  
う話も良く耳にする

はたして本当だろうか、、。

ガタン ゴトン ガタン ゴトン ガタン ゴトン

俺の目の前を電車が駆け抜けて行き

閉まっていた踏切が開き、足早に踏切を渡り切る

渡りきつてすぐ、踏切の閉まる前の甲高い音が俺の後ろで鳴った



### チャプター3「水面下」

アメリカ - ホワイトハウス -

1人の屈強な男が颯爽と廊下を歩く  
歩いて行く先の一室の前で足を止めた

コン コン

男は扉に向かってノックをすると  
扉の向こうからスグサマ返事が返ってきた

「入って」

その声を聞いて、1人の屈強な男が室内へと入っていく  
それほど若くはない

「失礼します」

男は部屋に入って一礼すると、ハキハキした口調で言った  
「例のシステムが完成しました」

部屋の机に座っている女性へと声をかける  
この女性もそれほど若くはない  
年の頃60歳といった所だろうか？

結構な歳をとっているようだ

「思ったよりも早く完成したのね」

女性はシタタカな口調で男の質問に答えた

「それで、運用は何時頃になるのかしら」

今度は女性の質問に屈強な男が答える

「今月中にでも、日本の自衛軍と共同演習を行い、実戦投入は来年以降になると思われます！」

男は変わらぬ口調で

淡々と答える



「そう、今回のシステムには期待しているわ」

女性は変わらぬたたかさで男へと問いただす

「先代の大統領はやってくれたわね、環境の事をまるで考えず

自分の任期間近でイラン空爆だなんて、私達への当て付けだったのかしら」

男はその質問に困惑の色を隠せなかった

発言にあまり自信が感じられない

「それは、わかりませんが、彼にも彼なりの思惑があつたのでしよう」

女性の表情はあまり明るくないだろう、今の現状に幻滅しているのは明らかだ

「予定通り例のシステムの運用に移ってちょうだい、期待してるわよ」

「はっ、かしこまりましたキアリー大統領」

男は腕を直角に曲げ手の平を水平に額に付けて言った

軍隊でいう敬礼のポーズだ

少しの間の後、男は大統領に背を向けて足早にホワイトハウスの大統領室を後にした

日本 - 某所 -

そこは地下にある隠された研究施設の一室

1人の科学者と1人の助手が居る

科学者はイスに座り、アシスタントは立った状態で机に手を付いて科学者に話かけている

「教授、AIの搭載までは行きませんでしたけど大丈夫でしょうか？」

助手の発言に科学者が耳を傾けて答える

助手の年齢は20代後半といった所だろうか

科学者の年齢は50代前半だ

「まあいいさ、今回の1件でAIは使えないにせよ、それ以上の性能を持つ物が使えるのだから何も問題ない」

少しの間が流れ、科学者がまた喋りだす

「むしろ良すぎるくらいだ、AIのレベルなんてたかが知れている、所詮人間には叶わないからね」

隣の助手は少し残念そうな表情をしているみたいだ

「そうでしょうか、私は思うんです、このようなシステムに人間を起用するなんて

馬鹿げていると、。、。」

その発言を聞いて科学者の耳が少し動いただろうか

その瞬間的な動作は科学者の心の動揺を映し出していたが暫くしてまた淡々と会話を続ける

「科学の発展に犠牲は付き物なのだよ、それがわからない内は君もまだまだ科学者とは言えないね」

その発言に答えるように助手が喋り出す

「こんな形でこのシステムを、彼らを使いたくはありませんでしたもつと別の方法が、。、あつたと、思います」

助手の口ぶりはとても残念そうで

最後の方はかなり声のトーンが下がっていただろう

そして少しの会話の後

助手が部屋のドアを開けようとした時

科学者の声で足を止める

「私はもう君の教授じゃないんだ、同業者として名前で呼んでもらいたいんだがね」

それは、とても無機質な口調だった

そして助手が答える

「ええ、失礼しました高島さん、それでは失礼します」

「ああ、期待しているよ鈴木君」

キィッ ガタン

科学者の少し後ろで扉の閉まる音がした

「ふう」

科学者は助手のいなくなった室内で独り言を呟いている

「若いつていうものは良いものだな」

研究施設の一室には科学者が一人、イスに深くもたれかかって

PCの画面をぼんやり眺めている

PCの画面には乱雑なパラメーターが表示され、それを眺めながら  
また呟く

「私だって平和利用のために使いたかったさ」

、  
、  
、

「それよりも明日の演説はどうしたものかね、、」

## チャプター4「徴兵」

俺は家に帰り、PCの電源を入れた

ブウン

PCの起動音が鳴りディスプレイの画面はバイオス表示からPS入力画面へと移行する

しばらくPCをそのまま放置し

先ほどスーパーで買った商品を冷蔵庫へと仕舞う事にした

リンゴ、ジャガイモ、ニンジン、玉葱といった感じにどんどん冷蔵庫へと納めていく

そんな作業中だったか、ズボンのポケットに入れていた携帯が激しく振動したのだ

俺は普段から携帯はマナーモードにしていた

正直、着信音なんて迷惑なものだ

それ以前に一々設定するのが面倒臭い

電話かメールかも携帯のバイブレーションのリズムでだいたいわかってしまうのだから必要ないと言った方が良さだろう

今回の振動のしかた、メールだ!!

一体誰からだろう、少しワクワクしながら携帯のメールを確認した

差出人は島根の隊長だった

島根の隊長（以下島根）

島根とは長いネットゲーム仲間だ、知り合って4年くらいだろうか特に軍隊関係物には目がないらしい  
良く一緒にゲームをしている

いまやっているネットゲームだって島根に誘われて始めたものだ  
仮想の戦争世界を良く2人で走りまわったっけ

島根は良く仕切りたがるので、仲間が望んでいようが、いなかろう  
が指示を出してたっけ

最近では2人でクランを作ろうかという話も上がっていたくらいだ  
だからといって、メールのやり取りをする仲ではない  
今まで島根からメールが来たのは数えるほどしかなかった  
いや、その必要がなかったと言った方が良いだろうか  
PCをつければメッセンジャーを通じて島根側から話かけてくるの  
だから

メールでのやり取りをする必要があまりなかったのだ

そんな事を考えながら、メールの内容を確認する事にした

以下メール内容

差出人：島根

件名：人生オワタ¥（＾o＾）／

本文：ちょ、おま

今、家のポスト確認したら

赤紙が入ってたんだが

（・A・）ウゼッ

おまえんちどうよ？

書いている本文を読んで、内容をいまいち把握できなかった俺は迷  
った末島根に返信しなかった

結局の所、冗談だと思ったのだ

PCを立ち上げればいつも通りメッセンジャーで勝手に話かけてく

るだろうし

やがて買い出した商品を仕舞い終え  
PCにパスワードを入力する

いつも通りの効果音が流れ、自分のプロフィールが表示された  
その後しばらくして

案の定島根がメッセンジャーで話かけてきた

以下島根とのメッセンジャーである

島根「おい、メール見たんか!!」

Ore「ん？」

島根「メールみたんか？」

Ore「ん？」

島根「(・A、)」

Ore「ああ、ごめん、見たよ見た見た」

島根「俺の青春を返せorz」

Ore「そういえば赤紙つてなんなの？」

島根「(・A、)ハッ それは徴兵だろ」

Ore「は？っ？徴兵！？、遂に脳みそまでやられたか、、。」

島根「[http://www.\\*\\*\\*\\*\\*.news](http://www.*****.news)  
ソース」

島根「そういえばお前何県？」

Ore「出身は茨城、今東京」

島根「あー、俺は北海道だから駐屯地は別の場所になるな」

Ore「ほむ？」

島根「それじゃ、親とかに連絡せなあかんから次は戦場であおうぜ」

島根様がオフライン状態になりました

島根がオフライン状態になった後も俺は島根の言った事が信用でき

なかった

何かのイベントに浮かれているのだろ

変な冗談も体外にしてもらいもんだよね、まあそんな感じだ

そんな事を考えながら島根の残したURLの先を確認する事にした  
たぶんニュースサイトに繋がっているのだろう

俺の思惑は的中してネットでメジャーな普通のニュースサイトが表示された

そのサイトに書いてある事を瞬時に確認する

いや、脳が勝手に働いたとっていいだろう

3秒ほど時間が流れてからだろうか

書いてある内容を思わず口に出してしまった

「あー、国会が自衛隊を急遽自衛軍へと変更

それに伴い徴兵制度を開始、アメリカの要請を鵜呑みにする形に、  
、。  
」

ニュースの日付を確認すると、発表されたのは今日の午前中になっていた

はっ、徴兵だって！！

この国はそもそも自衛隊で間に合ってたではないか

それをいきなり軍に格上げして、徴兵制度を開始するなんて

何を考えているんだ、国会は！？

俺は急な不安に駆られ、さらに情報を仕入れるためにテレビの電源を付ける事にした

チャンネルをコロコロ変えていく、どこもかしこも

徴兵の話をやっていた

やがて特番という文字をテレビ画面で確認してチャンネルを変える

のをやめる

特番は自衛隊が軍になった経緯やら、徴兵についての話を詳しくやっていた

特番の内容が

テレビの音声嫌でも耳に入ってくる

テレビの向こうでは、出演しているアナウンサーと、軍事ジャーナリストとの会話が淡々と繰り広げられていた

「いやー大変な事になりましたね、古河さん」

どうやら軍事ジャーナリストの方は古河というらしい  
ビシツつと着込んだ黒のスーツに赤いネクタイが印象的だ

「いやね、柳川さん、大変な事じゃないんですよ」

古賀は少し早口な喋りで柳川に言った  
それほど低くない声は、とても聞き取りやすく  
それ自体が今の俺にはとても痛く聞こえた

「日本が徴兵制度を開始だなんて、一体何所にそんな資金があった  
のだから、今の状態では一瞬にして破産ですよ」

「いやね、古賀さん、一説にはですよ、アメリカからの莫大な資金  
援助があったとか噂されていますけど」

柳川が古賀へと問いかける

「ええ、聞いていますよ、ですがあくまでも噂です、アメリカの情



勢は今とても苦しいですからね、ゝゝ。」

どうやら古賀の方は少し御立腹の様子だ  
今までの軍事ジャーナリストとして活動してきた中で起こった時代の  
大事件が許せない様子だった

それに古賀本人からしてみれば長年の軍事分析を台無しにされ、顔  
に泥を塗られたと言っているいい状況なのだから仕方のない話だろう

「古賀さん、少し話を変えましょう」

柳川が古賀へと振る

「ええ、いいですよ、私が答えられる事でしたら何でも」

「では質問します、何故今になって自衛隊を軍へと変更したのです  
よう？」

この徴兵制度の意味するものはなんだと思いますか？」

柳川のキラーパスが古賀へと飛ばされた  
その質問は誰もが気になる事だった

「それもただの徴兵制度ではないですよ？  
なぜこれほどまで年齢の制限幅が広いのでしょうか？」

少し喋って、柳川が黙り込む  
そして古賀の返答を待つ

しばらく考え混んだ後古賀が喋り始めた

「まず、今まで徴兵制度を導入しなかったのが不思議なくらいです」  
古賀は重い口を開くと

先ほどの意見から一転して徴兵制度を肯定し始めた  
「日本は世界でも有数の軍事大国に囲まれています」

特に中国、北朝鮮は要注意と言っても良いでしょう  
そんな中で日本には軍隊というべき存在がないのです  
いざ戦争にでもなってしまったら、一瞬にして植民地になってしまうでしょう」

柳川が割り込むような形で答えた

「といたしますと、近々大きな動きがあるのでしょうか……」

「戦争だつて!!」

俺は思わず叫んでいた

テレビを掴み、その奥を見つめる事しかできなくなっていた  
俺と同じ用にほとんどの人が今テレビへと釘付けになっているだろう

テレビの中の会話はあまりにもバカバカしく

とても信用できるようなものではなかったのだが

全テレビで放送されているその事実はどうしようのない事だった

ガサ ガサ コトン

俺はしばらくテレビを両手で掴んでいたのだが

扉に設置されているポストに何かが入ってきたため

配達物を確認するために玄関へと移動する事となった

俺がテレビの前から立ち上がると同時に

テレビの向こう側の軍事ジャーナリストがまた喋りはじめた

「それも可能性の一つです、まあ、世界への牽制、高まるアジア不信への抑止力といった所でしょう」

アジア不審？

そういえば原油の高騰で、各国はエネルギーの確保に躍起になっているんだっけ

その1つが武力による威嚇だったような

そんな事を考えながら送られて来た物を確認する

案の定、ポストの中に赤い紙が入っていた

赤紙とは聞いていたものの、まさにこの絶妙なタイミングで本当に来るもんなんだな、。。。

俺は玄関で赤紙を手を持ったまま、しばらく啞然と立ち尽くしていた  
動く事ができない

PCの置いてある六畳一間に戻る事が出来なかった  
部屋の奥のテレビからは今も柳川と古賀の会話が流れていた

それにこの赤紙は少し変だった

赤紙というくらいだから、薄っぺらなペラ一枚とばかり思っていた  
のだが

少しばかりの厚みがあり  
パンフレットに近い代物になっていた

恐る恐る中を覗いて見ると

表紙のちようど裏側に軍隊への入隊届と書かれていた  
指名や住所を記入する欄があった

対象年齢の幅はがやはり広がった

テレビでも少し

取り上げていたのだが、そこまで詳しい話はしてなかったので気に

はなっていた部分である

どうやら、赤紙によると今回徴兵を受けた対象者は「18歳以上、35歳」高校卒業以上の尚且つ学生に限るとの事らしい

まあ、当たり前か

急に無対象に人を& a m p ; # 2 5 6 2 0 ; き集めたら、日本の企業が大打撃なのだから

とはいえ、新入社員が一時的に雇えない状況は十分企業にとって痛手になるかな

次に目に入ってきたのは軍隊区分である

対象学校表という物が一緒に織り込まれていた

その表には東京23区すべての学校名（大学・短大・専門）が羅列されており

隅っこの方に軍隊名と配属部隊が記入されていた

俺は直様自分の学校を目で探した

「えっと、海王学園はっ」と

やがて自分の学校を見つけて確認すると

配属は陸軍、特殊部隊と書かれていた

まあ野戦部隊に配属しなかったのは不幸中の幸いだったと思う

そんな事を考えながら中国の軍隊の映像なんかを思い返していた

やがて赤紙を読んでいくと愈々最後のページへと差し掛かった

今までのページはというと、訓練内容やら給料やらが書かれているだけで

肝心の徴兵日が書かれていないのだ

この様子だと俺はいつ何所へいって不服を申し立てれば良いのかもわからなくなる

そんな事を考えながら最後のページをめくった俺はまた叫んでいた  
「明日！！」

ちよつと待て、いくら何でも急すぎるんじゃないのか、。

明日って学校はどうなるんだよ

心の中で色々な事を考えていただろうか

一瞬、明日のスケジュールの読む俺の目がある数字を見て止まる  
「6時45分」

その数字は明日の朝の始まりを意味していた  
バックれた方が良いのでは？

このまま実家に帰った方が無難なんじゃないのか  
そんな事を考える俺に追い打ちをかけるように  
注意書きには

「逃げた場合全国指名手配になります」

さらにその下に

「明日の朝迎えに行きます」  
と書かれていた

次にその隣の軍隊新規開発兵器の欄があり  
デカデカとガンムを作ると書かれていた、。

こんなふざけた奴らが明日来るのか

急に疲れが噴き出して来た俺は、部屋の奥にある自分のベッドで少し横になる事にした

PCの電源もテレビも付けたままだ

テレビの向こうでは今も尚自衛隊の異常行動を報道し続けている  
PCからはいつもと変わらない起動音が流れていた

そういえば島根の隊長って島根出身じゃなかったんだ、。

そんな事を考えながらベッドで目をつぶると急に睡魔に襲われたため今日はそのまま眠る事にした

## チャプター5「絶望のバス」

その鐘の音を聞いたは朝になってからの事だ

寮の玄関に設置されているチャイムの音が  
けたたましく、室内を過ぎ去っていく

その高音は俺の安眠を妨げ、深い眠りの中から外の現実世界へと引きずり出してくれた。

時計を見るともう6時35分を回っていた

寝ぼけ眼で玄関へと向かい

覗き穴で外にいる人物を確認する前に返事をした

「だれですか？」

朝、早すぎる時間の来訪客に少し不安を覚えながら

おぼろげな口調で尋ねる

ドビラの向こうに居る不審者はあっさり答えてくれた

「自衛軍です」

その言葉を聞いた俺は、昨日の事を思い出した

「あ!？」

覗き穴から外の様子を窺うと

扉の向こうには自衛官が一人、綺麗に敬礼の姿勢で立っていた

「今日入隊だと聞き、お迎えにまいりました」

「であります」とか言わないのかな、、、。

自衛官といえば「であります」といった感じだと思っていたのだけ  
れど

恐る恐る扉を開けると、扉の向こう側の自衛官は爽やかな笑顔で接  
してきてくれた

「朝早く大変ですね」

扉あけた俺の顔は急に目覚めたせいで

未だ皺くちゃで、はつきりしない表情をしていた  
呑気だと思われたかもしれない

「いえいえ、仕事ですから」

ハキハキとした口調で

続けて自衛官が喋りだす

「それよりも準備はできていますか？、当分ここへは帰ってこれないの」

呆然と立ち尽くしている俺に問い掛けてくる

「え、ええ、まあ」

淡々と喋る自衛官

「そうですか、赤紙にも書いてあったと思いますが、私物の持ち込みはいつさいできませんので」

自衛官は更に淡々と話を進めていったせいで

俺の頭は回りきらずに話の内容がまるつきし入ってこない

さらに言ってしまうえば、私物の持ち込みを禁止になっている時点で  
準備するものなど全くないのだ

啞然と見つめる俺に

一拍の間を挟んで自衛官が答える

「家族への連絡はすんできますか？」

その一言で大切な人達を思い出した、、。

あつ、親に連絡するの忘れてた

昨日はあのままずっと寝てたし、。

「いえつ、まだですけど」

慌てて、部屋の奥で野放しになっている携帯電話を手にとって電話  
をかけようとする



そんな俺を自衛官が注意した

「ダメだよ、ここら辺一体は情報規制がされているから、電話類は一切使えないんだ」

そんな事を言つて自衛官が自分の持っている携帯電話を貸してくれた確かに自分の携帯電話のアンテナは圏外になっている

早速実家へと連絡をしてみると電話の奥で聞きなれた声の主からいきなり質問攻めだ

暫くの会話をしただろう

親を安心させるだけでかなり精一杯だった

自分が直接軍隊に関らない事とか、まあ色々。

電話を切り一言おれいを言つて、電話を返却する

「ありがとうございました」

ごく一般的な人への挨拶だ

「それでは行きますか」

その後自衛官へと連れられて

寮の外へ出た俺は、寮の前へと止まっている自衛軍の車両を確認した映画でしか見た事の無い装甲車だ

さらにその後ろには自衛軍のバスが何台も列なっている

俺は自衛官の後ろをゆらゆらと歩き

自衛官はそんな俺をバスまで誘導する

そんな俺は

ふと異様な光景を目にして立ち止まった

「隣の部屋が、。。」

それは普通のお隣さんの部屋だった

俺の住んでいる寮は各階6部屋の二階建てになっている

そして俺の部屋はというと、1階の102号室

1階の正面から入って2番目の部屋だ

その部屋は調度自分の部屋の左隣に位置していたるので

外へ出掛ける時は必ずその部屋を横切って行かなくてはいけないのだ

確かその住人は女の学生が住んだと思う

全てが俺の通っていた学校の生徒なので大体の寮の人の顔は覚えている

そしてそいつの事もハッキリと覚えていた

覚えていたといっても隣に住んでいるのに挨拶もろくにしていない俺は

印象に残っている程度といったところなのだが

その部屋の扉を見るや、俺は言葉を失っていた

「、、、、」

その部屋の扉が打ち抜かれていたのだ  
見るも無残な姿になっている

車が正面の扉に突っ込んだ後のように  
ポツカリとその部分だけがないのだ

気になってしまったので俺の先頭を歩く自衛官に部屋の事を聞いて  
みることにした

「ここの部屋、どうしたんですか？、扉が無いですけど、、。」

その時の俺の口調はとても弱々しかったと思う

確かにその扉、昨日買出しに行った時には、はめ込んであったはず  
なのに。

少し言葉を選ぶ素振りをしたあと

自衛官が答えてくれた

「ああ、その部屋ね、チャイムを鳴らしても返事が無かったから扉をくり貫いたんだ

よ、案の定中に住人は居なかったけどね」

少しの溜め息の後、自衛官がまた喋りだす

「困っちゃうよね、後で探す身にもなってほしいよ」

困ってしまうのはこっちの方だと心の中で咳きながら

逃げなくて良かったと少しの安堵を噛み締めた

またトボトボと自衛官の後ろを歩く俺

やがてバスに乗り込むと、見知っている顔の多さに驚いた

まあ仕方ない話なのだろう、学校全体が徴兵されているのだから状況が状況なら軽い遠足である

少して先ほど俺を誘導した自衛官と上官らしき人が入り込んできた

「それにしてもこのバス誰も喋っていないな」

そんな事を呟く俺の正面で

自衛官と上官らしき人が会話をしている

話の内容が良く聞き取れる

「ここでの徴兵は以上であります!!」

「ご苦労、それでは出発する」

どうやらここら一帯の徴兵は以上で終了したという事らしい

説明もなくバスのドアは閉まり

エンジンの音が座席全体に伝わってきた

いよいよ発進するらしい

発進する直前各座席に目隠しが手渡され説明が入る

「今回君達が運ばれる先は軍の重要施設である、機密には最善の注意をはらい君達には

目隠しをしてもらう」

この状況下で逆らう者が誰一人も居なかったのは奇跡というしかない

いだろう

まあ逆らうのなら、予め逃げ出しているか

文句言って殴られるのも嫌なので

みんなしぶしぶ目隠しをする

目隠しする直前の眼光は目の前の自衛官を直視していた

しばらくして絶望のバスが走り出した、詳しい到着場所も告げずに

## チャプター6「マーキスの拳銃\*高島のトランシーバー」

今バスは目的地も告げずに走っている

そして

バス内の空気は異様だった

後ろの席からはイビキがちよくちよく聞こえる

こんな状況の中、眠れる奴はうらやましい

異様な空気の原因が、このクラシック音楽のせいなのか

それともこの状況下で静か過ぎる事が異様なのかは良く分からない

自衛軍が気を利かせてくれたのだろうか

俺は今トロトロと走るバスにゆられ、少しは聞いた事のあるクラシック音楽を聴いている

そんな状況が発してからはや一時間異常も続いていたのだ

次の曲がり角も分からない状況なので、無防備な状態を遠心力にやられ

自分の首の耐久力は徐々に減っていく、首にはシートベルトはないのだ

そんな事を考えている内にバスは止まった

軍の重要施設へは1時間半くらいの道のりだったのだろうか

近くに設けられているのがかなり意外ではある

暫くして上官から命令、否、説明があった

「もう、目隠しをとってもいいぞ」

そういわれ目隠しを取ったとき、おのずと疲れた溜め息が出てきた  
バス内中から溜息が聞こえる

そして目を開けここが何処なのか咄嗟に外を確認する  
だが外に太陽の光はなかった

あるのは頭上から降り注ぐオレンジの証明と  
バスでも簡単に運搬するほどの大型のエレベーターだけで  
四方を巨大な壁で囲まれて  
徐々にな下へと下向していく

東京都内から1時間半の場所にこんな施設があったとは  
下向していくエレベーターは地獄の淵へと俺達を運んでいるのかと  
見間違うほどに出かかった

10分くらい下向してやがてエレベーターが止まり  
前方の扉が開く、いつもな浴びなれた蛍光灯の証明がバス全体を照  
らした

だが、まだ到着ではないらしい  
そこから15分くらい曲線を描く二車線道路を走り  
やがてバスが駐車場らしき場所へと到着した

駐車場から外を覗くと、外には巨大な建造物が姿を現した

よくもまあこんな巨大な施設を建設できたものだなあと  
内心呆れを覚えたくらいだ。

それにしても、ここは何処なのだろうか  
エレベーターは10分近く降りていただろう  
たぶん地中にいるのだろっけ  
地中だとしてどれくらい深くにいるのだろうか

エレベーターの速度はあまり早くなかったと思うのだが

バスを降りた俺達を待ち受けていたのは

円形状の軍用施設だ

（施設はドーナツ状に作られており、中心部分に大型のホールが設けられている）

啞然と立ち尽くす俺達を

自衛官が一行に整列させ奥のホールへと誘導する

その誘導の合図に逆らう事もせず、学生はみな中央のホールへと歩いて行った

やがて俺は視野でホール内を確認できる所まで来ると

すぐ様にホール内の空気が俺達を包んだ

その空気はザワザワしていて

中からはヒソヒソ話、メソメソ話がそこらじゅうから聞こえてきた

まあ無理もないのだろう

急に徴兵をになって、今までが静かすぎたのだから

そんな事を考えながら、俺はホール内を見まわした

良く見ると女性も結構居るみたいだ

そつえば今回の徴兵、男だけじゃなかったらしい

朝わかっていた事なのだが、今の自衛軍とやらは女すら戦力に使うみたいだ

奥のホールはかなり広く、二階建てのドーム状に作られていた

中はかなり広くできており、1万人以上の人間が今ホール内に収容されている

そんな中で俺は列になって中央付近で立っているのだ

やがて誘導が終り、自分の席へと案内されると、正面のパイプ椅子へと腰をかけた

今俺の正面25メートルくらい先には壇上がある

その中心に演台が設けられていて、演台の上にはマイクが設置されていた

壇上の右端には黒い布で覆われた1m80～1m90くらいの大きさの置物が置いてある

生憎、置物には布がかぶせられていて、それが何かはわからないようになっていた

良く見てみると人の形をしているようにも見えるが

それはありえないか、。。。

壇上から25メートルくらい、自分の後ろには100人近い人の列が有り

四万を2階まで人で囲まれていた

俺は最前列から大体18、9人くらいの場所にあるパイプ椅子に腰を掛けている

それにしてもあの置物はかなり気になるな  
いったいなんなのだろうか

暫くして2人の足音と共に  
ざわめきが消えた



足音は重量感のあるドシ、ドシとした音ともう片方は、小柄な男性特有の軽い音だ

やがてその足音の正体が壇上へと姿を現した  
今壇上には2人の男の姿がある

どうやらこの二人がこれから何かをはじめらしい  
これでこの施設へと運ばれてきた理由がわかるだろう

イスへ腰を掛けている俺はやがて2人の男性へと目を向けた  
2人とも50才前後といった所だろう、一人は白衣を着ている  
その隣の男はというと、外人だ、たぶんアメリカ人だろう  
白人と黒人のハーフといった感じで肌は少し黒く、髪は軽めのリー  
ゼントがかかっている

びしつと着こなしている軍服が特徴的で  
腰のあたりに拳銃のホルスターが見えた

中身は入っているのだろうか

一方の白衣を着ているほうはというと  
着ている白衣はヨレヨレで、髪は少し白髪交じり、髪型は天然アフ  
ロと言った感じだ

気になるアフロの大きさなのだが、大体13ミリといった所だろう  
壇上に立っている男の格好は対照的で、ハーフは身長がでかく、白  
衣を着ている方かというと、やはり小柄だった

やがてハーフが、ビシツと決めた軍服を靡かせて  
演台の中央へ立つと、マイクを握り絞めて  
いきなり喋りだした

「諸君！！おはよう、そして始めまして」。  
司会者はいないのだろうか、。

いきなり大声に鼓膜が破れそうになった

そして少し冷静になって考えてみる

あれ？あの人外国人だよね？

そう、彼は壇上に立ち、俺達に語りかけている  
それも、普通の日本人とまるで変わらない口調で

「入隊おめでとう、と、言うべきかな」

壇上でいきなり始まった演説に終止啞然としている俺たちを尻目に  
25メートル先の外国人は淡々とスピーチをしている

「私の名前はマークス、マークス中将だ」

外国人はマークスという名前らしい、そして階級は中将だという  
「この中でここへ呼ばれた理由を知っているものはいるかな？」

一声に「はあ？つ？」と、いう空気が辺りに立ち込めただろう  
目の前の外国人は何を言っているのだろうか

ホール内の空気は臨界点付近まで沸騰してきているだろう

いっそのまま、暴動が起きてしまうのではと思ったくらいだ

そんな中俺は冷静になって辺りを見回していた

ホール内の出入口は1階2階合わせて16あり

出入口に格2名ずつ、自衛軍、アメリカ軍兵士が取り囲んでいた

アメリカの軍兵士はM16A1を肩から下げていて  
日本軍も良く見慣れないライフルを肩から下げていた、多分第86  
式小銃だろう

まあこんな重火器を構えた連中を前に騒ぎ出そうという度胸を持つ  
たツワモノは一人も  
いないだろうけど。

壇上ではマークスの演説が今だ続いている

「諸君、君たちの国は腐敗しきつていた」

マークスは一拍の間の後に続けて言った

「諸君の国家日本は巨額の負債を抱えていた。そんな中、我が国家  
が多額の資金援助を約束したら、見事に君達を軍隊へ一時的に預け  
ると約束してくれたよ」

詰る所、負債で苦しくなった日本の国会がアメリカの多額の資金援  
助に目がくらみ

アメリカが主催した徴兵令に強制参加させられる羽目になったのか

「恨むのなら我々を恨むよりも、この国の政治化を恨みたまえ民主  
主義とは良い物だな諸君！」

マークスはそう発言すると、いきなり高笑いをはじめた

そんな高笑いが癪に障ったのだろう

1人の学生からヤジが飛ぶ

「好い加減な事を言うなー！！ お前達がやっている事はれっきと  
した人権侵害だぞ、」

その学生に続くよう「そうだー、そうだー！！」と初めに立ちあが  
った学生を皮切りにそこら中からヤジが飛ぶ

やがてざわめきは頂点に達し、ホール内に居る学生全員が一声に大

ブーイングだ

もう、マーキスの演説といった所ではなくなってしまった

壇上のマーキスが何を言っているのかも聞き取れないくらいに騒がしくなった時

マーキス中將は深い溜息と共に黙りこむと

腰に掛けているホルスターから拳銃を取り出して天井目掛け勢い良く引き金を引いた

ズダア――――ン

続けざまに二発、ホールの上空目掛け発砲した

ホールという構造上、発砲音は反響し四方から爆発音が耳へと返ってくる

鼓膜が破れるくらいの発砲音はやがて収まり

あたりは一瞬にして静まり返った

やがて効果観面といった具合にマーキスはニヤケルと先ほどの演説を再開した

それにしても、本物の銃声ってこうも重たいものなのか  
ゲームとは比べ物にならない。

「いいかね諸君、諸君の国は我が国家に守られている事を忘れてはならない

世界でも有数の軍事大国を眼下に諸君らは恐怖を覚えないのかね？  
平和ボケも大概にしてもらいたい！」

壇上ではマーキス中將がビシッと着こなした軍服をなびかせ  
ウロウロと歩きながら喋っている

「そこで、我々は考えたのだ。決してこれ以上国土を脅かされない

方法を

世界への軍事的抑止力、核兵器以上のものを我々は考えたのだよ」  
少し間を置いてマーキスがまた喋りだす

「詳しくは高島に説明してもらおうか」

そう言くと、マーキスは自分が先ほどまで使っていた演台の席を明け渡した

白衣を来た男、名は高島というらしい

「あゝ、君達、遠方からはるばるいらっしやって、歓迎するよ」

高島という男性の声はモゴモゴとした低い声で、マイク越しでも聞き取りづらかった

「私の名前は高島、高島現三だ、ここの実験施設の責任者をしていく」

先ほどまでマーキスという軍人が責任者だと思っていたのだが  
どうやら責任者はこの高島という男らしい

高島が喋りだすと、マーキスは壇上の右端に置いてある大きな置物の前まで歩を進めていた

「マーキスが過ぎた事を言った事をお詫びすがね、私は君達がこの施設に来てくれて感謝しているよ、選ばれた兵士としてね」

兵士、、、

その一言でホール内に同様が走る、

また一層とざわざわしだすホール内

俺達は兵士なんかではない、れっきとした学生なのだ

ざわめき出す俺たちを見かねてか

高島が自分の腰に掛けていたであろうトランシーバーを手にとると

マーキスへ一言

「マーキスもういいだろう、これ以上の演説は無駄だ」

高島がマーキスへと合図を出し

マーキスは置物の布へと手を駆ける

マーキスの行動を見て高島が無線でなにやら喋っているようだ

「鈴木君、いいだろう、動かしてくれたまえ」

その言葉を聞いてマーキスが置物にかぶせてある布を勢い良く取り  
払った

バツ、と布が宙を舞う音を聞いた

やがて黒い布は地面へと落ちると

布の中から姿をあらわしたのは、人間と大差ないくらいの「人型の  
置物？」だった

「なんだ！？あれ、。。」

見た目の肩幅も、大きささも人間と大差ない

四肢もまったく人間と変わらない

特に特徴的なのは四肢の奥だろう、人間でいう所の筋肉が普通に見  
えるのだが

その部分には無数の黒いチューブラしき物が確認できた

そして頭部はというと大きな一つ目の目玉（カメラ）がアクリル  
状の仮面に保護されている

あたりがまた少しざわざわとしてきただろうか

まさかこんな物を見せるために俺たちをワザワザ呼び寄せたんか？

少し不安を覚えている学生を尻目に

人型の置物が動きだす

壇上に設けられている階段をゆっくり下りる人型を直視する学生達  
やがて階段をおりきり中央の通路へとゆっくり移動し

また止まる

ホール内から驚きの声が上がる

そんな俺も驚きを隠せない学生の一人だった

壇上の人型の動きはゆっくりではあったがとてもなめらかで  
中に人が入っているのではないかと見紛ったくらいだ

「まさか、あれ動くのかよ」

「なんだあのロボット」

「おいおい、これから何が始まるんだ」

あちこちでヒソヒソ話が聞こえる

壇上では高島が無線で合図をだしていた

「鈴木君、昨日の段取り通り頼むよ」

高島の合図を聞きロボットがまた、ゆっくりと、ゆらりと動き始めた  
初めゆっくりと歩いていたロボットは  
だんだんと地面を蹴る力が増していき、どんどん歩く速度が速くな  
っていく

やがて先ほどまで歩いていたロボットは気が付けば猛スピードでホ  
ール内の一本道を走っていた

シュタツ、シュタツ、シュタツ

このホール内は壇上から正面の出入口までの距離が約100メー  
トルくらいある

そして俺の目の前のロボットは50メートルの距離を5秒で走り抜  
けていった

そして60メートルくらい走った辺りで勢い良くジャンプをし

3メートルくらい上空で1回転、宙を舞う

やがて空中を舞う人型はズダンという音と共に大地へと帰ってきた

勢い良く着地を決めると、ロボットは暫く動かなくなる

そんな、ロボットを熱心に見詰める学生へと自衛軍の隊員が俺達に  
配ったのは、この施設内の資料だった

## サイクロプスに関する資料

サイクロプス（Cyclops）プロジェクト設定資料

サイクロプスとは完全遠隔操作型二足歩行ロボットの事である

サイクロプスとは本来ギリシャ神話に出てくる一つ目の巨人の事を言う言葉で

今回その巨人をモチーフにしたロボットを作成した

ロボットの名前はサイクロプスTSC（Test Soldier Cyclops）以下TSCである

このTSCは特殊骨格を中心に240の人工筋肉を組み合わせで作成されており

人工筋肉には空気を入れる事により伸縮する特殊ゴム繊維を使用している、

この特殊ゴム繊維を使用する事で人間の動きを忠実に再現する事に成功した

骨格の中心部には空気を吸排するポンプが設けられており

そこから空気を各人工筋肉に送り込む仕組みになっている

各部位毎に小型ポンプが存在し、中心部で生成した空気を小型ポンプは蓄える働きをする

小型ポンプ内にはダイナモが存在し、強力な電力の発電もここで行われる

人工筋肉は人間の3倍の働きをするため、片腕で60kgの重量に耐える事が出来



さらに、歩行速度は人間の1・5倍、ジャンプ力はMAXで3Mだ

TSCにはCPUが2つ存在する

TSCの動力は電気であるため、TSC特有の電力輸送方式が存在する

地球の衛星軌道上に打ち上げた人工衛星が太陽光で発電した電力をレーザーで輸送する

輸送された電力を使ってまず第1のCPU（受信用）が稼働

この受信用CPUは電力の受信、命令の受信、そして輸送された電力を使ってメインポンプを動かす働きしかない

メインポンプを動かして生成した空気はやがて、各小型ポンプへと輸送される

輸送された空気が小型ポンプのダイナモを動かす事によって強力な電力が発電されて

第2のCPU（送信用）が作動する仕組みになっている

このCPUはサイクロプス内で一番電力を使う頭部のカメラの起動と、受け取った信号をコクピットへと返信する働きを持っている

コクピットは、信号さえ送信する事ができるのならばどんな形のもので良い

極端な話、サイクロプスが目の前に存在するのならラジコンのコントローラーみたいな物でも良いのだ（本作サイクロプスには登場しない）

本作サイクロプスでは黒い卵型のコクピットを施設内に150機完備している

このコクピット内からTSCを動かし各地で作戦を展開して行く事になる

（コクピットは移動可能）

このTSCであるが、消費電力はそれほど多くはない  
それゆえに、人工衛星からの微弱な電力輸送で動かす事が出来るの  
である

TSCにはモーター類が頭部以外ほとんど使われていない  
構造がシンプルなため、モーター駆動系のロボットに比べタフな事  
人工筋肉を使う事によって実現した、滑らかな駆動

ここまであげたTSCだが、弱点も存在している  
TSCは駆動に使われているゴム繊維が命といって良い  
それゆえに耐熱性能は他のロボットに比べはるかに劣る点は痛い所  
である

それ以外にも各小型ポンプが電力を作っているので、小型ポンプの  
破損による電力不足

メインポンプを破壊された事による根本的な問題

最後に挙げる、ありえない事ではあるが  
人工衛星（Zeus Terra Star）ZTSを破壊された事  
による電力輸送が出来ない状態

これらがTSCの弱点である

それを補う為にも今現在開発途中ではあるがいくつかの対策が存在  
している

対策事例については後に報告するものとする

## 外装および兵装についての説明

今回君達に見てもらった、TSCはテスト用に今現在開発している地下専用のタイプだ

そのため外装などは特に取り付けられてはいない

これはサイクロプスの動作説明をより円滑に執り行う為に施行された措置と考えてもらってもかまわない

動力部分が直接見える方がわかりやすいだろう

（なお衛星のレーザーは地下にまで届かないため、テスト機にはバッテリーを使っている）

（実戦機にも充電用バッテリーは存在する）

本来のサイクロプスには外装が取り付けられる事になる

この外装次第では10万発の弾丸にすら耐え

5トンの衝撃波、爆風にすら動じない機体を生み出す事が出来るのだ

さらに今現在開発中の物に外部ユニットと連動した耐熱性能を持つ外装も研究中である

## TSCの兵装についての説明

TSCは人間と同じ動きをする事が出来るため、装備は一般の人間歩兵と変わらないものを装備する事が出来る

M16シリーズや自衛軍使用の武器は当たり前のように装備可能だ

さらに重量や衝撃に対しての耐性が強いため

本来、装甲車両に積んであるM60などの大型機関銃も歩きながら撃つ事も可能だ

|            |                       |
|------------|-----------------------|
| 標準耐熱温度     | ：500度                 |
| 耐久重量（片腕）   | ：100kg（両腕）：250kg      |
| 脚部の耐久重量    | ：1000kg 骨組の耐久重量：800kg |
| 必要電力（CPU1） | ：50w（CPU2）：350w       |

## チャプター7「適正試験」

俺は一通りサイクロプスの説明を読むと

次のページへと資料をめくる

次のページには送信者側の説明が書いてあった

つまりコクピット側の説明である

そして説明文を読もうとした時だっただろうか

マーキス中將が喋りだした

「どうだね？我が国家と諸君らの国家が協同開発したサイクロプスは」

ガヤガヤとした空気が一瞬にして静まりかえる

「これから諸君には適正試験を受けてもらう」

試験？俺はすぐさまその言葉に反応していた

「な」に對した事ではない、このサイクロプスを各自、動かしてもらうだけの事」

適正試験とは俺達がサイクロプスを動かす事らしい

そしてこの施設はサイクロプスの開発、研究する施設だという事が書いてあった

施設の名前は「メルトダウン」

マーキスが壇上で試験についての話をしようとした時だったのだろうか  
1人の勇氣ある少女が勢い良く手を上げる、そして一言

「質問があります！！」

「ふめ、何かね」

手を上げた少女がマーキスの合図と共に喋りだす

「この大規模な軍事施設ありますけど、軍隊だけじゃこのロボット動かせなかったんでしょうか」

マーキスが少女の質問に答えようとした時だっただろうか

高島が演台へ割り込んで行きマイクを取りあげた

「いい質問だ、君の名前を伺っておこうかね」

少女は名前を聞かれた事と、高島という男の言葉に安堵をおぼえたのだろう

その顔はほっとしていた

「私の名前は草加、草加雅美つていいいます」

少女の名前を聞いて、高島の顔が少し綻びを見せると

高島は演台で喋りはじめた

「最近の機械は複雑になりすぎている、サイクロプスも同様だ  
乱雑なパラメーターを逐一設定し動かすには今の自衛官ではおいつかないのだよ

君達みたいに新鮮な学生の頭脳でなければ

そう、天性の者が必要なのだよ！

ここへ集められた君たちは電算系だと聞いているよ

そこで君達のゲーム脳を活用させてもらう事にしたのだ」

電算系「ゲームオタという考えはいただけないが

心の奥底では高島の発言には一理あるとも思っていた

内心、小さい頃からロボットが好きだったし

目の前で動いているサイクロプスを見て、苛立ちの中に踊る何かを感じていた

やがて高島が少女に質疑をおえ、草加が席へとつく

次は1人の学生が手を挙げる

「ヒツ、質問を1つ良いですか？」

先ほどの少女に比べ声は裏返って

その学生はかなり落ち着かないイメージだった

高島が学生に答える

「なんだね？」

「テッ、適正試験って言いましたけど、試験に落ちる事もあるんで

すか？ 落ちた場合どうなっちゃうんですか、。。」

今度はマーキスが演台に割り込んでくると、高島の代わりに答える見慣れない外国人の姿に学生は身を竦め、膝はガクガクと震えていた

「いい質問だ！！」

マーキスが待つてました！！ とばかりの威勢で話を始める

「もちろん試験に落ちる事はある、その場合は自衛軍の格軍隊へ適正を再度判断した上で配属される、その場合殆どが戦場最前線というわけだ、覚悟しておきたまえ」

ザワザワとした空気がまた流れる

学生が少し落胆した表情で席につこうとした時だっただろうか  
マーキスがまた喋りだした

「名前を聞いていなかったな、名前を聞いておこつ」

少年は表情を曇らせながら答えた

「いつ、いえつ、結構です、」

「そうかね」

そんな学生の姿を見ながら俺はある事を考えていた

適正試験の事である

もし適正試験に落ちた場合は最前線送り、良くて駐屯地で雑用をやられるだろう

どちらにせよ、家に帰れないのならなるべくこの施設にかかわっていく方が得策か

ならば適正試験はなんとしても合格しなければならない

どんな形であっても

高島達が壇上から姿を消してから暫くして適正試験が始まった

この研究施設に集められた1万人近い学生は次々とホールから姿を消して行く

1回の誘導で4人という少数、そして試験開始してから30分後、自分の番が来た

自衛官の支持に従い、パイプ椅子を離れ激動のホール内を後にした俺を先頭に初めて顔を見る学生が3人後に付いて歩いてくる  
1人は服に付いているフードを頭に深く被り陰気な雰囲気を漂わせている

その後ろを小柄な青年が続く、顔の表情は青ざめて終始地面を見つめながら歩いていた  
最後に長身の男が付いてくる、少し猫背に体を曲げ、ズボンのポケットに両手を入れると周りをキョロキョと見まわしていた  
顎の不精ひげが印象的だ

ホールを出ると自衛官がエレベーターへと誘導して、さらに地下へと俺達を案内する

やがて5人を乗せたエレベーターが下降を始めた

「こんな地下にある施設なのに、まだ地下があるなんて」

俺の後ろで誰かが喋っただろう、その声はエレベーターの下降していく音にかき消され

虚無の闇へと姿を消していく

たぶん小柄な青年がいった言葉だろう

「なんやっちゅうねん、せつかく内定が決まったちゅうに」

落胆した表情で俺の隣にいる長身の男が言った

男は暗い関西弁で喋っていた、大阪出身だろうか？

「私語は慎まないか!!!」

秩序が乱れかけているのだと思ったのだろう

自衛官が俺達に激を入れる

その言葉を聞いてエレベーター内の学生をみな身を竦めた小さくなる俺らを尻目に数秒後エレベーターは止まる  
やがて、自衛官が先頭を歩いて行き



暗い通路の先にある第3演習場という所で足を止めた

恐る恐る中に入る俺達を置いて自衛官はドンドン中へと入っていった

中の証明はついておらず視界はほぼゼロと言っていいだろう

自衛官はなにやら無線で話をしているようだ

「こちら第3演習場、証明の点灯をよろしく、どうぞー」

無線から「了解」という声が聞こえると、しばらくして証明が灯された

ぼんやりしている視野が次第に鮮明になる

俺の目に入ってきたのは黒い卵型の機械だった

それも1つではない

結構な数存在している

大きさの幅は1メートル、高さは3メートルといった所だろうか

それが第3演習場の中だけでも15台は存在していたのだ

俺は恐る恐る自衛官へと質問した

「この機械何んですか？」

先ほどとは全く違う表情を見せ自衛官は快く答えてくれた

「ああこれね、サイクロプスの無線送信装置だよ、つまりはコクピットっていうやつだね」

その言葉を聞いて口元が少し綻びを見せる

やわらかい表情、少しニヤケルていたと思う

そんな綻びを見せた俺に自衛官が言った

「さっき渡した資料あったよね、それに書いてあったと思うんだけど」

自衛官のその言葉を聞いて手元にある資料を見る3人

俺達が設定資料に目を通している間に

技術者らしき人が3人くらい中に入ってきた

自衛官は技術者に挨拶をし

技術者は卵型の機械（以後コクピット）の設定に入る  
あれこれ、設定している姿を横目で確認する

コクピットの外面には製造番号らしきものが大きく書かれていた  
第3演習場にはTSS-301-315までの型番を持つ  
黒い卵型の機械、コクピットが15台存在する

今回技術者達はTSS-301-304までのコクピットの設定を  
しているようだ

俺らが今現在4名なので、4番目までのコクピットの設定というわけだ

しばらくして、技術者が設定と確認を終えたらしい

俺達に声をかけてきた

「それじゃー、乗ってもらおうかな、その君こっちへ来て」

そういうと、技術者の一人がコクピットのハッチを空けて、俺へと  
合図する

番号順というわけで案の定俺は一番最初に呼ばれたわけだ  
呼ばれて前へと出た俺をコクピットまで技術者が誘導する

俺は状況をあまり良く把握できず、その場に居る技術者に説明を求め  
るように質問した

「あゝ、操作説明とか他にも色々と説明する事があるんじゃない  
ですか？」

俺の質問を受けた技術者は、暫く空を見るような仕草をした後  
俺の質問に答えてくれた

「詳しい説明はアナウンスで流れるから心配しなくてもいいと思う  
よ」

そういわれ半ば押し込まれるような感じで俺は黒い卵型の機械、通  
称コクピットへと入  
る事となった

コクピットのハッチが閉まる間際だっただろうか

先ほどの技術者が俺に声をかけてきて一言

「試験始まるまで少し時間があるから資料に目を通してあげれば大体分かると思うよ」

そういわれ俺は読みかけの資料をまた手にとり読み返す事とする

コクピットの外に居る技術者が軽い挨拶を終えた所で

いよいよ俺の乗っているコクピットのハッチは閉ざされてしまった  
閉ざされたコクピット内は真っ暗で資料を読むどころではなかった、  
、、。

## チャプター8「操作説明」

いつ終わるとも知れぬ暗闇の中で俺はもがいていた  
先ほどの技術者は暗視ゴーグルでも持っていたに違いない  
この暗闇の中でいっただいどうやって資料を読めばいいのだろう  
そもそも今居るこのコクピットは何なのだ  
サイクロプスを動かす装置だというのは確かなのだろうけど  
こんな素人にハイテク機器を動かせると彼らは本当に思っているの  
だろうか

俺は逆鱗の中暫くブツブツと眩いていただろう

コクピット内の椅子に座ってから

すでに5分という時間が過ぎたであろう

未だ試験は始まらない

外ではたぶん俺の後ろを歩いていた連中が今頃コクピットに押し込まれている所だろう

そういえば俺は彼らの名前を知らない

同じ状況で試験を受けるというのに

名前一つすら知らないのだ

自分の名前にはすぐに気がついたっていうのに

まあ、世間なんてそんなもの

気にも留めていなければ一瞬で過ぎ去ってしまう

そう、この暗闇だったぶんそうだ

とは言ったものの、このままずっと暗闇が続くようであれば  
考えものだ

なんて言っただって今置かれている状況は新手の拷問に近いのだから

いや、新手でもないか、昔親に押入れに閉じ込められた感覚にちかい  
そんな事を考えながらさらに5分の時間が過ぎ耐えられなくなった  
俺は

手当たりしだい触ってみる事にした

とりあえず正面を触ってみる

乗るときにチラリと見えていたのだが

正面には机らしきものがあつたのは確かなのだ  
そこにキーボードがあるのもわかつていた

とりあえずキーボードを叩いてみる

カチッ      カチッ      カチッ

全くもって反応しない

電源が入ってない見たいなのだから当たり前か

キーボード以外も触ってみる

ガン      ドムッ      ザク      （注意：効果音です）

変なスイッチ音だけが無常にも流れていった

コクピットに入りこんで、あたふたし出してから大体15分くらい  
たっただろうか

正面から激しい光源とともに耳元からアナウンスが流れた

「全試験者の搭乗を確認完了しました。      只今から試験を開始しま  
す」

今は正面の光源のおかげで何処にどんなスイッチがあるのかも分か  
るようになってきている

正面においてあるキーボードの配列はごく一般的なJISキーボードだ

ただ少し普通と違う部分を述べるならば  
机にめり込んでおり、ノートPCみたいな一体型になっているという点である

さらに正面のスクリーンである、大きさは目測だが42型くらいはあっただろう

今はブルーのスクリーンが表示されており、その光源のおかげで先ほどの資料を読む事もできるようになっている

アナウンスの音源なのだが調度自分の後ろから流れてきていた椅子と一体型になっているのであるう、スピーカーから音声が出てきている

音声は先ほど壇上で聞いた科学者の声が耳元でしていた

「やあ、気分はどんな感じだね」

俺は心の中で「最悪だ」と眩いた

「まずは試験に入る前に幾つか操作説明をしなくてはいけないね」

「まず君達の正面にあるキーボードを見てもらえないかね」

高島の声通りに正面を見る

そこには先ほどのキーボードが存在していた

さつき俺が暗闇に耐えかねて乱打したキーボードだ

キーボードの間を確認し終わると高島からまたアナウンスが入る

「キーボードを中心に左を見てくれないかね」

アナウンスの声の通りに左を見る

そこには黒い御椀形の出っ張りが存在していた

「それを開けてみてくれないか、上に開くようになってるからね」

声の通りに上へと開ける、御椀形の出っ張りは簡単に開き90度の直角にすつと止まる

開いた先に目をやると

そこには手の形と同じ窪みと、奥の方には薄らとスイッチが確認できた

各指毎に1つ、中指には2つ存在している

「次は右側を見てくらないかね」

その声の通りに右側に目をやる、そこにも同じ御椀形だ

また蓋をあける、そこにも先ほどと同じ手形だ

左側との大きな違いは、各種ボタン以外に掌の部分に丸いコロコロ動く物体が存在する事だ

それはさながらトラックボールマウス（マウスをひっくり返したような感じ）のような

装置だった

中指のボタンも右側は1つしか存在していなかった

「見てくれたかね？」

アナウンスが入る

「そこに両の手の平を置いてくれないかね」

そういわれアナウンスの声の通りに手の平を乗せる

ボタンは少し固く少し指に力を入れないと押せないようになっていた

「準備が出来たかね、各種操作説明に移るからついてきてくれたまえ」

「なお、これは事前に録音されたものである、もう一度最初から聞きたい場合はキーボードのRを押してくれ」

「なんだ？ただの録音だったのか」と心の中で眩いた

今俺はアナウンスで流れた音声通りに事を進めている

手で力チ力チスイッチを押して、動揺している心を静めている

それはさながら貧乏ゆすりのような仕草だ

暫くしてまたアナウンスが入る

先ほどのアナウンス一周分くらい待たされただろうか

「では次の説明に入る事にしようかね」

いままでブルースクリーンだった画面が切り替り

先ほどのホール内の映像へと移り変わった

酷くうなだれている学生達が画面へと映し出されていた

友達を見つけて話し込んでいる奴もいる

慰めてもらっている学生の姿も見える

椅子に持たれて寝ている奴、さまざま

こんな映像を見せてどうするのだろうかと考えていた時

また少しして高島のアナウンスが流れる

「まず基本操作だ」

高島のアナウンス内容を要約するところなる

- 左手の操作 -

小指のボタン    しゃがむ

薬指のボタン    左へ移動

中指のボタン    上の方前進    下の方後退    (押し込む強さによって

走り歩きと調節可能)

人差し指のボタン    右へ移動

親指のボタン    ジャンプ

一通りアナウンスが終了してある事に気が付く

この操作方法、昨日俺がやっていたゲームの操作方法だ    間違いないFPSだ、。



この操作方法ならFPS初心者でもキーボードのボタンに迷ってという事がない

キーボードを見る必要がないのだからあたりまえか

さらに初心者でも幾分直観的に操作できるはずなのだが

こんな操作方法でホールのあれは機敏に動いていたのかと思った

おれも初心者の時はちらちらキーボード見て操作してたな  
そのせいで顔をあげたら敵がいて、酷くやられた物だな  
壊かしい思い出がよみがえる

アナウンスの終わり際

「基本操作に付け加えて言うよ、伏せる動作をしたい場合は小指のボタンを押した状態

で親指のボタンを押してくれたまえね」

なるほど、そうやって匍匐状態になるのか

やがて高島の左手の操作説明が終わりを告げる

「次の説明に移る前にもう一度アナウンスを聞きたい場合はRをおしてくれたまえ  
ね」

また一周分待たされるのかと思い、多少暇だった俺は資料に目を通す事にした

資料の順序からして次は射撃設定に移るという事らしい

それ以外の事も色々と書かれていた

音声の設定やら

キーボードが設置されている理由など

まあ色々

仲間との通信方法なんかもこれに書かれていた

全部に目を通す事が出来なかったにせよ  
大体の事を把握する事が出来た  
一周分くらいの間の後画面が切り替る

それと同時にアナウンス

「では射撃の説明に入るよ、いいかね」

正面のスクリーンに映し出された画面は射撃場で

縦一列にサイクロプスが並んでいるのがスクリーン上で見てとれる  
正面50メートル先には人を模った紙のターゲットが一枚張り付け  
られていた

「右手の操作だ、君達の掌には今トラックボールがあるね」

俺の手の平には確かに丸いボールがある

それをコロコロ動かすと画面上の視点がグルグル回っている

「それを動かして見てくれるかね」

先ほどから弄くりまわしているトラックボール、これで射撃をする  
と思うと少しガツカリだった

なんにせよトラックボールの操作はやり辛くてしょうがなかった  
まあ馴れなのだろうけど、。

「次は重要だから良く聞いていてくれたまえね、  
今回は人指し指しか使わないと思うが一応説明しておこうかね」

- 右手の操作 -

小指のボタン 仲間との連絡（音声連絡）作中内は無線で統一

薬指のボタン 各種グレネードの選択

中指のボタン 兵装固有の行動（スナイパーライフルの場合スコ  
ープといった感じ）

人差し指のボタン 射撃

親指のボタン 武器の切り替え

右手の操作説明を終えた高島のアナウンスが流れる

「それでは今からプロフィールを作成するよ、射撃の癖をサイクロプスにインプットするからね。 正確に正面の標的 （人の形をした紙）を打ち抜いてくれたまえ」

そういわれ、高島のアナウンスが終わった

ビーっという合図と共に物凄い発砲音がスピーカーから四方八方流れてきた

ダダダッ ダダダッ ダダダッ ダダダッ

ダダダッ ダダダッ ダダダッ ダダダッ

銃器の設定は3点バーストになっているようで、設定の変更ができなかった

俺も恐る恐る人差し指のボタン（以後トリガー）を押してみる事にした

ダダダッ

激しい発砲音と共に画面上の視点が激しくぶれる

トラックボールのせいでリコイルコントロールが激難しい為だと悟った

「リコイルコントロール」

マウスを操作して射撃中に玉を中央に集中させる為の技術

上級者になると一発も外さないで敵を倒す事ができる

暫くしてプロフィールは設定が終了した

サイクロプスの大演奏会はやがて終りを告げ

いよいよ試験本番である

今回はリピートがキャンセルされており、すぐさま試験開始になるらしい

やがて前方の画面上に映し出されたのは5メートル四方の長方形建造物が立ち並ぶ

無骨なフィールドと

縦一列に立ち並ぶ5台のサイクロプスといわれるロボットの姿だった

## チャプター9＋9・5「試験前＋作戦内容の確認」

これからやる事はゲームではない

先程の射撃場だってそうだ

銃器は日本軍の第86式小銃を使っていたじゃないか

使われている弾はなんだ、あの威力、衝撃、実弾じゃないか

ゲームじゃ日本軍のマイナーな銃なんて起用されるわけがない

しかも銃器を使用していたのは何だ、ロボットだったじゃないか

ロボットが正面の標的めがけて射撃だなんて

オレはあんな光景今まで見た事ない

目の前の出来事はスクリーンを通してだけど本当に起こっている出来事なんだ

うなだれる俺を尻目に高島のアナウンスが流れる

「プロファイルの作成は終了したよ、いよいよ適正試験本番だ覚悟して取り掛かってくれたまえね」

一拍の間の後高島が続ける

「試験内容の説明は彼の方が適任さね」

また一拍の間がとられ

先ほどの壇上にいたアメリカ軍人中将の威勢の良い声がコクピット内に響き渡る

「今回の試験はアメリカ陸軍特殊部隊との合同演習も兼ねて行われる諸君はレッドチーム、我々特殊部隊はブルーチームだ  
ルールは至ってシンプル、諸君は我々の動かすブルーチームの演習用サイクロプスを倒せばそれで良い」

その音声はマークス中将のものだった

相変わらず耳を貫くような大きな声だ

少しの間を挟んでマーキスがまた喋りはじめた

その声は少し譲歩気味の口調、声の大きさも先ほどよりは小さい

「諸君もいきなりプロとの戦闘では少し分が悪いだろう

今回は誠に特別な事ではあるので、諸君には助っ人を1人自衛軍から付ける決まりとなっている」

助っ人、通りでサイクロプスが5体もいるのか

先ほど運ばれた奴らと俺を含めても1体は余るからな  
これで納得がいく

「ランカーは諸君の隊長となるので命令は絶対に聞くように  
以上、任務内容を確認再度確認した場合はキーボードのCtrlキー  
IとNを同時に押す事で確認できるようになっている」

マーキスのアナウンスも終盤へと近づいてきた頃だろう

緊張が頂点に達してきたみたいだ

俺はマーキスの放送を聞く反面大きく深呼吸していた

手の平の汗からも汗が噴き出しているのがわかる

過度な緊張状態の影響で胃もキリキリと痛む

「試験開始は今から5分後、以上で、私からの説明を終わる」

マーキスの放送が終了した

やがて「ブツ」という音と共にコクピット内は静寂に包まれる

聞こえる音と言えば、自分の呼吸音

さらには心臓の音くらいなものだ

試験開始は5分後、俺は開始までの少ない空き時間を利用して試験  
内容を確認する事にした

チャプター9・5「作戦内容」

試合内容はチームデスマッチ

ラウンド数は3ラウンド、先取戦ではないので3ラウンド終了時点で試験終了となる

1ラウンドの制限時間は10分

勝利条件は制限時間内に敵を全滅させるか、終了後見方の人数が多い方を勝利とする

機体の耐久力は試験の為HPを100とし  
敵側からの射撃ダメージは、腕及び足25胴体45頭部80となっている

なおグレネードの類は敵味方なくダメージを与えるため、チームキルを防止するという名目上隊長機以外は実装されていない

コクピット内には音声通信装置が存在する

通信装置を利用し仲間とのコミュニケーションを図って  
任務を遂行してくれ

レーダーは画面の左上に存在する

味方の位置と地形を把握するのに便利だ

仲間が戦闘でやられた場合は右上に表示されるようになってい  
なお誰にやられたかの表示はされないので注意してほしい

今回は演習ステージを使用する

天井までの高さは20メートル

広さは半径100メートル

5メートル四方のキューブが乱雑に存在するのでそれを障害物として利用し戦闘を進めてくれ

「演習場で駆動するサイクロプスと実戦型との違い」

施設内に存在するサイクロプスには例外無く衛星からの電力供給がされないため

実戦型とは少し違った電力供給システムで駆動するようになっている  
実戦型が頭部に電力輸送するのに対して、演習型は背部に電力輸送  
先が存在する

衛星と演習用で電力の輸送方式が違うわけではない

これは、サイクロプス本体の中でも頭部が一番単価が高いので  
演習用だけでも単価をそぎ落とす措置として行われている物で  
アンテナの性能を演習用は大幅に落としているからである



## チャプター10「試験開始：第1ラウンド」

ビーーーーー

っという甲高いビザー音と共に

サイクロプスが動くようにある

トラックボールを動かすと視点がコロコロと動く

一通りの運動操作を確認する

その後あたりを見回すとそこには俺を取り巻くように

4台のサイクロプスの姿があった

肩のところに先ほどのコクピットの型番が書いてある

TSC-302 304 それとTSC-000

隊長機は何所か第3演習場とは違う別の場所から操作しているのだろうか

あの演習施設にTSC-000の型番を持ったコクピットは存在しなかったはずだ

そんな事を考えていると連絡が入ってくる

「ぼさつと立ってないでさっさと行くよー!」

その連絡戸と共に周囲を観察していたロボット達が一斉にTSC-000の方向を向いた

この音声連絡でわかる隊長は女性だ

女性が隊長という事で俺は少し不安になったが

このまま突っ立ってるわけにもいかなないので隊長へと連絡を返す

資料に書いてあった通りに右小指のボタンを押す

音声通信はこのボタンを押している間有効になるらしい

俺はボタンを押して発言した

「どうやって攻めますか？」

その言葉をいう俺は半ばやけくそだった

最前線送りだけはどうしても免れたいのだ

その思いだけがこの馬鹿げた戦争ゲームへの参加を表明させたのだ  
他の3人も同じ気持ちである事を祈るばかりである

隊長機から通信が入る

「とりあえず付いて来て、ここに居たらやられちゃうからね」

「了解」

俺の他に1人から通信で合図が入る

その声は先ほど聞いた関西人風の男性の声だった

通信ナンバーTSC-304だ

その合図共に隊長機の後を迫るようにして一列になる形で4台のサイクロプスが移動を始めた

残念ながらTSC-302号機はそのまま動く事はなかった

見たまんまだとラウンドリタイヤという事になるが

エラーで動けないのかもしれない

俺は一番最初にコクピットに押し込まれたので

誰が02号機を操縦しているのかはまったくといっていいほどわからないのだ

暫く進んで隊長機へと通信を入れる

「あのー、できれば敵の情報が欲しいんですけど、隊長わかります？」

04号機も同じ事を考えていたらしい

「そうやね、アメリカの演習も兼ねると言ってたんやから、武装辺りは知りたい

ね」

俺たちの間に答えるように隊長機から通信が入った

「ごめんね、私軍隊に詳しくなくて。今これ動かしているのも臨

時だから」

続くようにして04号機が答える

「なんや臨時なんか、臨時の隊長さん大丈夫なんか？」

隊長から通信が入る

「武装は多分こつちと大差ないと思うけど、。」

「武装が同じである事を祈るしかないですね」

確かにそうである、こちらの武装は自衛軍正規のライフル一本のみ演習と言っている以上米軍の武装がこちら側と同じとはかぎらないのだ

とはいえ、レイブンが言っていたように隊長格以外がサブ武器を使えないとしたなら

多少は楽になる

今回隊長は臨時だといっていた

動き方からして、サイクロプスを動かすのに多少慣れているみたいだけど

戦闘が始まるまではなんともいえない状況だ

「それにしてもこのサイクロプスとやらのモチーフがFPSになつてるのは驚きやな」

「そうですね、直観的に動かせるのは良いですね」

「おつ、俺以外にもFPSを知つとる奴がいる奴がいたとは」

会話に花が咲きそうになった頃

隊長から通信が入って来る

「私語はつつしみなさい」

シレっとした口調で隊長から連絡が入る

その言葉にすかさず04号機が突っ込みを入れる

「なんや聞こえとつたんか」

「ええ、全部ね」

3人で会話をしながら50メートルくらいキューブの森を直進した時だろうか

カッン カッン カッン

金属が固いものに当たる時の音に近いだろ

その音はとても低い位置から交互にリズム良く鳴っていた  
まるで足音のように

その不穏な音を耳にして全員が足を止めた

「今の音なんです？」

不穏な音の正体を確かめる為に通信をいれる

「多分敵の足音だと思うけど、リズムからして歩いてるみたいね」  
隊長機から通信が返ってきた

このステージ内は無音とっていいくらいほとんど音がしない  
先ほどからする音といえば、味方機の走る足音くらいなものだった  
しかも足音はガシャ、ガシャとかなりの騒音を立てている

この距離で敵の足音が聞こえると言う事は

既に敵に位置を把握されているかもしれない

「ねえ、ちょっと見てきてくれないかな？ 01号機君」

隊長が直接俺の機体を名指しして通信を送ってきた

「嫌ですよ、敵のレベルもわからないんですよ？」

04号機が会話へと参加する

「そうや、こういう時は隊長が体張るもんとちゃうんか？」

「だって、怖いじゃない！ あっ、こういう場合ってあれよね。隊長  
長命令っていうのかな？」

隊長の無茶な発言が宙を舞った

その発言でも分かる、隊長は素人だ、。。。

仕方なく隊長へと通信を入れた

「わかりました隊長命令ですね、今ちよつと見て来ますから」

渋々と隊長命令を受け入れた俺は

キューブとキューブの隙間から辺りを覗き込むようにして見回す事にした

音の方角を確かめ、ジグザグに配置されたキューブを縫うようにして歩いて

物音のした方向へと進んで行く

2つくらいキューブを進んだ時だろうか

そつと覗き込むと

敵の青いサイクロプスを発見する事が出来た

俺はその事を伝えるために全体に少し叫ぶように通信を入れた

「敵です、発見しました！。青いのが1機です」

隊長機から返答がくる

「わかつわ、すぐそつちへ行くから待つてて」

通信の連絡がプツンと切れた時だろうか

俺の後方からガシャン、ガシャンというサイクロプスの走る音が聞こえた

あつ、あいつら走つてやがる、ゝゝ。

その音はとても勢いよく鳴り響いていた

そしてどんどん俺の方へ近づいて来る

しばらくして俺の後ろに到着したのだろう

「あつ、ちよつとどいてゝゝゝ」

俺はその声になる方向へ振り向いた

「へっ！！！！」

ドガシャーン

隊長が止まりきれずに俺へと激突してきた

その弾みで俺は隠れている場所から前方へと弾き飛ばされるように

外へと放り出されて

しまった

俺の正面には今敵が居る

放り出された衝撃で俺のサイクロプスは勢いよく転げる

そしてそんな間抜けな俺の姿は敵から丸見えだった

サイクロプスも激しくバランスを崩しているらしく直に射撃体勢を取れる状況ではなかった

正面の敵は既に銃器を構えていた

見るにM16のグレネードランチャー装備型だ

とても実践的である

脳裏に一瞬衝撃が走る「隊長機か!!」

驚きのあまりコクピット内で叫んだ時だ

カチツつというトリガー昔と共に

ポーーーーーンっという奇怪な音が正面からした

煙を噴いて丸い物体が勢いよく飛んでくる

やがて丸い物体は俺を通り過ぎ

真後ろの壁に跳ね返ると地面に落ちた

その瞬間に辺り一面が激しい光源に包まれる

その光が収まった頃、俺のサイクロプスは機動をやめた

「左下に体力メーターがあるって資料書いてあったっけな」

とブツブツ眩きながら下を見ると

体力が0になっている

次に右上を見る

確かやられた奴が表示されるはずだったよな

そこにはTSC-000 TSC-001 TSC-004

と書かれていた

04号機から通信が入る

「どないしたつちゅーねん」

隊長機からも連絡がくる

「なんか動けないんだけど、、」

しばらく見方側は混乱していた

そして混乱が収まりかけた頃、隊長達に通信を入れる

「敵の武器がライフルにグレネードを装備してるタイプでした」

「つまりどういう事？」

隊長から連絡が返ってきた

まったくもって自体を飲み込めていない様子だ

04号機から通信が入る

「ああ、グレネードランチャーか」

04号機は軽く舌打ちをして続けた

「隊長機にでも鉢合わせたってことか、おたく運ないなー」

そう、煙を噴いて飛んで来た物体はグレネードランチャーの弾だ

発光の仕方からして実際に爆発したわけではなく、光源の照射面積

によってダメージが

決まる仕組みらしい

それにしても、一気に3人を倒すほどの威力、脅威である

俺達の会話に隊長が割り込んでくる

「ぐれねどらんちゃって何？」

隊長の発言はとてもめんどくさいものだった

正直その隊長の質問に返答しようか迷ったものの

一応隊長なのだという事もあり連絡をする事にした

「遠投系の爆発物です」

初心者でも直観的にわかるように

俺の言葉に04号機も続ける

「手榴弾やな」

俺たちのこのやり取りで隊長は納得したみたいだ

それにしても気になるのは02号機と03号機である

02号機は動かないから仕方ないとして

確か04号機の後ろをずっと03号機がついて来てたはずだが

先ほどから全然会話には参加して来なかった  
少し気になる事があったので

隊長機へと連絡を入れる事とした

「やられても、見方への通信って出来るんですか？」

「うん、それは問題無いと思うけど、。」

隊長からの返答を元にトリガーボタンを押す

さっきまで自分のサイクロプス主観映像だった画面が

03号機の主観視点へと変更された

03号機はその場を一步も動いていない様子だった

目の前の3体のサイクロプスを見て、呆然と立ち尽くしている

03号機へと通信を入れる

「03号機さん聞こえますか？」

その声を聞いたのだから、頭部がキヨロキヨロと動いた

俺の画面の視点が左右に動くのが確認できた

様子からして音源を捜しているみたいだ

無論音源は先ほどやられた連中なのだが

それ以上に自分を名指しした通信に驚いている雰囲気だった

04号機から通信が入る

「なんや聞こえているみたいやな、ちょい、視点を上下に動かして  
くれるか？」

04号機の問いかけに答えるように

視点が上下に動く、3回くらい往復しただろうか

やがて視点が元に戻った

さらに04号機が続ける

「何でええ、喋ってみ」

今度は画面が左右に振れる

「無理なんか？」

03号機の視点が中央で止まったと同時に隊長機から通信が入る



「ボケツと立ってないで、その影敵がいるから気をつけてね」  
また視点が上下する

どうやらこれが分かったという合図らしい  
割って入るように俺は連絡を入れる

「今そこに居る敵無視した方が良くないですかね？」

俺の中には少し府に落ちない事があつた

それを03号機に確認してもらいたく

03号機へと通信を入れる

「正面を突破して敵軍のスタート地点までいってみてくれないうか？」

少し、ヤケクソっぽく言った

そのヤケクソに反論するように隊長から激が飛ぶ

「そんな事したら無駄死にじゃない！！。え？、最後の1機まで無駄にやられに行けつ

ていうの？」

隊長の甲高い声コクピット内に響き渡り

女性特有の高音が耳の奥に残る

それを返すようにして04号機から通信が入る

「隊長はちよつと黙つとけ、今回やられたのだって元わと言えはあんたのせいや。その非を責めない01号機君は大した奴っちゃで」

04号機にまで子供扱いされた、、、。

その後内輪採めは1分近く続いたが

その間03号機はその場を動く事をせず、俺ら敗者の会話をじつと静観していた

内輪揉めしている間も敵のカッン カッン とう足音はしたけれども俺達の残骸を確認しようとはしてこなかった

それでもわかる敵の様子が少し変だ

たぶんこの50メートルのラインにあるキューブが底辺なのだろう

それ以上の深追いをしない作戦なのだと思うのだが

1分の後隊長が納得し先ほどみたいに隊長命令をだすと、約束してくれた

3体のロボットの抜け殻の横には最後の兵員であろう

03号機が今立っている

彼がやられればブルーチームの勝利となるだろう

04号機が03号機へと質問した

「今体力どれくらい残つとるんや？」

やはり03号機からは返答がなかった

「やっぱり無理なんか」

今や03号機は引つ張り凧である、俺、隊長、04号機から質問攻めだ

だがそれらの質問に彼が答える事は無かった

やがて隊長命令が入る

「いい、さつき、01号機君が言ったみたいに中央突破で攻めるから」

その声を聞いたのだろう

また上下に視点が振れる、納得したって事か

やがて3号機は敵がいた角とは別の通路を選び

ガシャン、ガシャンと音を立て突き進んでいく

途中キューブの隙間からM16を持った敵の姿が見えた

先程の奴とは違う型番だ、さらにライフルの先端にはグレネードが換装されている

03号機の赤いサイクロプスを見るや銃器を構えるが、すぐさまキューブの影に03号機が隠れた為に、構えを解くとまたカッ、カッという足音だけが響きわたっていた

俺はその光景を見るや、全員に通信を入れる

「やはり変です、敵側が攻めて来る気配がありません。しかも先ほどと同じ武器でしたよ」

04号機から通信が返ってくる

「ほんまかいな、全員隊長装備って事かいな」

「なんとも言えないですけど、そうなると思います」

俺達の会話中も直03号機は体長命令を忠実に守り、中央を直進していく

やがて80メートルほど前進した時だろうか、ようやくキューブの森が終わりを継げた

正面にはブルーチームのスタート地点が見えた

あたりを見回し恐る恐る正面へと出ようとする03号機

前に出ようとした03号機を静止させよとして俺は連絡を入れた

「ちよつと待って!!」

他の人達が気がついたのかは分らない

俺はかすかに映る黒い獲物をいち早く発見して連絡を入れた

だが一瞬通信連絡が遅かったのだろう

既に森の中から広場へと歩を進めていた03号機も一歩遅れて敵を見つけたらしい

03号機の銃声が響きわたる

ダ――――ン

だが銃声は一発だけしか鳴らなかった

標準の場合なら3点のバーストショットの重く乾いた銃声が聞こえるはずなのだが

03号機の銃声は1発分しかならなかった

それと時を同じくしてだろう、敵の方から重く甲高い銃声が鳴り響く  
ターーーーンという甲高く重たい音だ

そして倒れ込む03号機

03号機のカメラはその正体をしっかりと捕えていた  
スタート地点の右隅で馬鹿でかい銃器を構える  
青いサイクロプスを

形状からして見るにスナイパーライフルか！！

「クソキャンブかいな！！」

04号機から通信が入る

形状からしてオートマチックのスナイパーライフルだ

「なーに？あれ、、。」

困惑する隊長に04号機が通信を入れる

「スナイパーやな」

俺も会話に参加する

「多分あれが隊長機ですよ！！」

「じゃあ敵の戦力つて、圧倒的じゃないか！！」

04号機やはり驚きの色を隠せない様子だった

「どういうこと？」

隊長機から連絡が来た

やはりまた自体を飲み込めていないらしい

「スナイパーのキャンパー程厄介な相手もいないんですよ、敵は追  
つてこなかったんじゃないんです。多分俺達を中央におびき寄せて  
隊長機がそれを狩る、そういうフォーメーションだったんですよ」

俺は少し興奮気味に答えていたと思う

「気になる事つてそういう事だったの？」

隊長機から連絡が返ってくる

「スナイパー倒すんに同じくライフルが必要やな」

「そうですね、ライフル1本しかもバーストの制約付きじゃ武が悪  
すぎますよ」

隊長が話に割り込んで来る

「こんなに戦力差があるなんて聞いてないわよっ」  
混沌とした会話を割くように

ビーーーーっというブザー音が辺りに鳴り響いた  
ブザー音と共に今まで03号機の主観だった画面が真っ暗になる  
どうやら試験の第1ラウンドが終了したみたいだ

画面が真っ暗になって直ぐにアナウンスが入る  
マーキスの声だ

「次のラウンドは5分の休憩の後行われる、味方側との通信は生き  
ているので各自作戦を練るもよし休むも良しだ」  
その後低い高笑いと共にアナウンスが終了は終了した

耳障りな高笑いに耳を貸す暇もなく、俺は先ほどの事を思い返して  
いた

まさか演習も兼ねているとは聞いていたけれど  
ここまで戦力差があるとは、せめてグレネードでもあれば良いのに

俺はそんな事を考えながら深く椅子に寄りかかった  
第2ラウンドはどうしたものか、。。。

## チャプター11「惨敗：第2ラウンド」

最初のラウンドが終了してすぐの事

マーキスのアナウンスが入り、今5分間の休憩を取っている  
その間俺のチームはというと

終始隊長と04号機パイロットの言い争いだ

誰のせいで負けただの、足手纏いだの

正直そんな言い争いなんか構ってる暇なんかない

もしかしたら、適正無とみなされて駐屯地に輸送されてもおかしくない状況

だって言うのに、この人達は どうしてこんなにノンキなんだろう、  
、。

2人の言い争いを割くように俺が発言する

「次どうやって攻めますか？」

隊長が続くように答えた

「あー、君決めても良いんじゃない？ 04号機君じゃ当てにならないし」

「賛成やな、隊長の意見じゃまた事故るだけやしな」と04号機が  
被せるように発言する

本当にこの人達は協調性が無いんだから、、。

俺はとりあえず、このまま休憩が終わるのを危惧して

作戦プランを全体へ提示した

「なら各自バラバラに攻めた方が良いんじゃないですかね、多少は  
勝つ見込みがあると思うんですけど」

正直また激突されても困る

それに固まって移動してまたグレネードの餌食になるのは御免だ

暫くして俺のプランについての感想が2人から返ってきた

「そうやな、一人でやらせてもらっわ」

「えー、一人でやるの？」

意見が分かれたが、隊長のわがままにはお構い無と言った具合に通信を入れる

「決まりですね」

「決まりやな」

俺達がプランを決定をした後も隊長が終始喚いていた

その喚きに耐えかねて俺が隊長へと通信を入れる

「付いて来るのは勝手ですけど激突はしないでくださいね」

「わかってるわよ」

その発言を最後に無音の時間が続いた

03号機も喋れるのなら

もつと色々作戦が練れたのだろうけど

休憩時間の終了間際

真っ暗だった画面がスタート地点の映像を映し出した

その映像を見て04号機から通信が入る

「おー、戻つとるやんけ」

世界の最新技術を見て04号機がはしゃいでいる

「このシステム作るのにどれだけ労力使ったと思ってるのよ」

隊長機から無線が入ってくる

先ほどやられた場面からTSC達がレッドチームのスタート地点に並んでいるのだ

型番が同じという事はTSCは先ほどと変わらず同じ機体だ

そして今彼らは1ラウンド目が開始した時と同じ映像を映し出している

こんな技術力が世界にあったのとは

心の奥底で少し感心していた

そよりも隊長について気になる事が出来たので通信を入れる

「隊長って開発者か何かだった……」

俺の発言は無残にもビーという試合開始を告げるブザー音に引き裂かれた

そして甲高いブザー音が全員のコクピット内に響き渡る

適正試験、第2ラウンドの開始だ

四号機から連絡が入る

「それじゃー、オレは左隅から攻めてくるわ。付いて来たいやつが居たら勝手に付いてきーや」

そういうと04号機は左の隅のキューブの森へと姿を消していったそれに続くように03号機も左の隅へと移動する

04号機達を見届けるようにして俺も移動を開始する

「了解。俺は右隅から攻めるよ」

そう言い終えると俺は右隅のキューブへと歩を進めた  
案の定隊長が俺の後ろへと付いてきた

調度良い機会なので先ほどの質問をもう1度する事にした

「隊長って開発者か何かだったんですか？」

その質問に隊長は心良く答えてくれた

先ほどのヘマを帳消しにしたかったのだろう

「うん、そうだよ。ここの運営責任者の助手をしてるんだから」

隊長が自信満々と言った具合に返事をする

とはいえ、結局の所、助手なのである

「そうなんですか、凄い兵器を作ったもんですね」

嫌味っぽく隊長へ連絡を入れる

俺の意見に続くように04号機からも連絡が入る



「そうや、そうや、こんな変な実験に無理矢理参加させやがってからにー、オレの内定かえせや！」

「ごめんね、最初はこんな事の為に使いたくなかったんだけどね」  
04号機パイロットの激しい口調に負けたかのように急に隊長の声のトーンが下がった

先ほどの自身は何所へいつてしまったのだろうか  
04号機から無線が入る

「そんなのは、どうだってええねん。問題は結果や結果、結局こんな事に使われとったら無意味っちゅう話やねん」  
確かに04号機の意見にも一理ある

さらに04号機が続けようとした時だ

04号機の音声から銃声らしき音が聞こえて来た

ダダダッ　ダダダ　という自衛軍のライフル音と  
タタッ　タタッ　タタ　というM16の射撃音だ

どうやら敵側は射撃制度を上げるためにバーストを解除してるみたいだ  
いだ

こっち側の射撃が当たらないと思われているのだろうか  
交戦中と思われる左側へ通信を入れる

「今は隊長を責めるのは止めた方が良いみたいです」

軽い舌打ちの後04号機からの無線連絡が止んだ  
隊長からの連絡もそれ以降無かったので、ロボットの足音だけが不気味にスピーカーから木魂していた

右のキューブを進んで45メートルくらいだろうか  
カッ　カッ

というサイクロプスの足音が聞こえたので移動を止める  
どうやら敵さんは先ほどと同じ場所にいるみたいだ  
隊長に連絡を入れる

「この先、敵が居るので気を付けてください

「わかったわ」

隊長は一言さみしげなく口調で言った

さっきの04号機に言われた事が応えているのだろう

やがて俺はキューブの角から通路へと出ると

そこには青いサイクロプスが銃器を構えていた

まるで俺たちが出てくるのを待って居たみたいだ

また先ほどのグレネードランチャーを構えている、あれで俺達を一斉に焼くつもりなのだろうか

武器を構える仕草を見て一気に敵の方へ走り出す

今度はグレネードを使われないように一気に間合いを詰めたのだ

それに焦ったのだろう、大慌てで、グレネードからライフルへと武器を切り替える敵機

しめたと思い、俺は射撃体勢へと入る

走りながら撃った所で何処に弾が飛ぶとも分からないからだ

サイクロプスの移動を止め、少ししゃがんでライフルを構える

俺に少し遅れて後ろの通路へと出てきた隊長機の援護射撃が入る

ダダダッ　ダダダッ　ダダダッ

ろくにリコイルもしない隊長の射撃は敵の上空のはるか上を撃ち続けていた

それに続くように俺もようやく射撃を開始する

ダダダッ　ダダダッ

トラックボールでの射撃はやはり難しい

それに加えて3点バーストだ

6発撃って敵の腕と足に1発ずつしか当たらなかった

ようやく敵機も射撃体勢を整えたのだろう、敵の射撃が始まった

タタッ タタッ

頭部への正確な射撃が2発入る

その2発で沈められてしまう俺の機体

更に、その後の2発で隊長のサイクロプスを一閃した

暫くして右隅の画面に俺達の名前が表示された

それと同時に04号機から連絡が入る

「お帰り」

どうやら先ほどの銃撃戦で左側を攻めてた連中は既にやられていたらしい

集中していて全く気がつかなかった

隊長に連絡を入れる

「隊長、これ動かすの始めてでしょ？」

俺の唐突な質問に隊長が反論をする

「そんな事ないわよ、さっきだってホールで動かしてたんだから！  
」

隊長の話だこうなる

先ほどのホール内でサイクロプスのデモ機を動かしていたのが隊長なのだと

空高くジャンプして1回転し、かつこ良く着地したのが隊長なのだと

04号機も同じ事を考えていたらしく疑問の声があがった

「あれ隊長やったんか、偉いかつこ良く決とつたな、ああ言う動き俺らもできへん

のか？」

04号機の言う通りだった

1ラウンドが始まって動作確認をしていた時だ

少しジャンプをして遊んでいたのだが

せいぜい2メートルくらいしかジャンプできなかった

それに比べてホール内のサイクロプスは凄かった

上空を一回転それも3メートルという常人離れたジャンプをしていた

そんな事を考えていた時

隊長から通信が入る

「ああ、あれね。あの時はプログラムで動かしていたからできたんだよ」

俺は隊長へと返答した

「この機体も、プログラムで動かす事ってできるんですか？」

一拍の間を挟んで隊長が答える

「ええ、勿論」

隊長の言葉はとても生き活きとしており

さっきまでの沈んだ声とはまるで別人の声に思えた

隊長の発言を最後にブザー音が鳴り響く

2ラウンド目終了のお知らせだ

やがてレイブンのアナウンスが入り

先ほどのように5分間の休憩が取られた

休憩中俺たちは特殊プログラムを使った作戦を練ることにした

勿論参加したのは3人だったのだが

3人の会話にももう慣れていた

## チャプター12-1「特殊コマンド説明\*反撃の序曲：第3ラウンド開始直後」

〃サイクロプス特殊コマンドの説明〃

サイクロプスには特殊コマンドが存在する

この特殊コマンドは状況に応じて色々と組み合わせる事が可能でシステム面に予めインプットしておけば、コマンドを入力する事で使用可能だ

なおコマンドはキーボードで入力する

たとえば、本来のTSCのジャンプ力だが2メートルとなっているこれはTSCの限界値ではなくリミッターを掛けている為にこの数値となっている

これにリミッター解除プログラム

〃ハイジャンプ〃を入力する

まず初めにキーボードのctrlを押した状態でHを押し

その後Enter押す事で事前入力完了となる

この状態でジャンプボタン（左親指のボタン）を押す事で3メートル弱まで

ジャンプ力が上昇する

〃前方宙返り〃

Ctrl+R Enter ジャンプボタン

TSCがホールでやった特殊ジャンプ

その他に様々な特殊コマンドが存在し

人間をベースとした行動はすべて使用可能だ

近接戦闘による行動としてジャンプ蹴り 上段回し蹴り 正拳突き  
など

コミュニケーションとして **ガッツポーズ** 挫折（orz）など

なお特殊コマンドは一度使用すると再度入力をしなければ同じ行動でも使用する事が出来ないようになっている。

|| 反撃の序曲 ||

隊長は一通り説明を終えた後「で、どうするの」と言った感じだった俺は隊長へと質問する

「このキューブの上に登れないかな？」

隊長から連絡が返つて来る

「流右にきついかな、。でも無理じゃないかもしれない」

そう言い終わると、隊長はブツブツ考えこんでしまった

隊長は無線を切るのも忘れていたため

全員のコクピット内には小声の独り言が響き渡っていた

「ん」でもあれか、Rコマンドを使ったら壁に激突するし」

「うーん、Hコマンドだけじゃ届かないしな、、、、、、、、、」

3分くらいそんな独り言が続いただろうか

隊長は俺達に「うん、やってみようね」と一言いい終えるとまた黙

りこんでしまった

こっちの足手まといが一気に頼みの綱へと早代わりである

やがて視界が暗闇からスタート地点の映像へと切り替り

ブザー音が鳴る

ブザーが鳴り終えて

最終ラウンドが開始された

試験のクリアラインがどれくらいかはわからない

正直敵の兵装が違いすぎるので、ぐっと低いのかも知れない  
そんな事を今考えた処で意味は無いのだろうけど

やはり気になってしまうのは確か話だ

試験開始直後痛かった胃も今は痛くない

手の平の汗も大分落ち着いた

敵が目の前に来たって今の俺なら驚きはしないだろう

こうなった以上最後まで戦ってやる

最終ラウンド開始直後隊長から通信が入る

「それじゃーやってみよっか、03号機君こっち来て」

隊長に言われるがまま03号機が動きだす

正面のキューブへと隊長に誘導されて

キューブと向かい合うようにして止まる

03号機の位置を確認して隊長から通信が入る

「ctrlを押してTを押してから前進」

隊長の元気の良い声が響き渡る

響き渡る声に命令されて首を上下に振ると

やがて03号機はキューブに背を向ける状態で密着し

ピタッと止まった

「今度はctrlを押してKで前進して」

隊長に言われる通りコマンドを入力したのだろう

03号機がしゃがみ片膝の姿勢で止まる

「みんな、03号機君の上に乗るからね」

隊長が言うには03号機を踏み台にするとの事らしい

隊長が通信を終えると隊長機が03号機へと進んでいった

やがて隊長のTSCは03号機の肩に登るとバランスよく直立した

隊長機から通信が入る

「少し前進して」

そういうと03号機は左手中指を少し押したのだろう

さっきまでの方膝のポーズから直立姿勢をとり

3メートルを軽く超える巨人の出来上がりである

また隊長から通信が入る

「それじゃーいっくよ」

少して抜けた掛け声と共に

隊長のサイクロプスは俺の頭上6メートルの高さまでジャンプした  
クシャッと崩れ落ちる03号機を尻目に

隊長機が優雅な空中浮遊を終えキューブの天辺へと華麗に着地した  
その着地の後、隊長機が小さくガッツポーズをしたのが見えた

俺はそれを見て 「あんな事もできるのかと」小さく眩いた

見とれる俺たちを見上げるようにして立ち上がった隊長機から無線  
が入る

「どんどん来てね、ぼさっと立っているとやられちゃうわよ」

一番最初もさっきだって、やられたのはあんたのせいだ！と思った

04号機の無線が入る

「俺も頼むわー」



03号機がそれに応え、また先ほどの作業を開始した  
04号機の機体が空中へと舞う

キューブの天辺へと華麗に着地する

俺もそれに続くようにして、キューブの天辺へと  
2人を追い駆けるようにジャンプした

その間03号機は大忙しである

04号機を送った後俺を空中へと持ち上げた

03号機は何度もクシャツと潰れながらも、俺たちの作戦に参加してくれたのだ

そのおかげで、今3機はスタート地点正面のキューブの上に登っている

やがて落ち着いた所で隊長から無線が入る

「登れたのは良いけど、この後どうしよっか、。」

啞然とする隊長を見かねて04号機から通信が入る

「敵の頭上におるんや、このまま狙撃したらええやないか」

俺が04号機に続くように通信を入れる

「ええそうですも。敵が軍隊だっていうのならこちら側はゲリラ戦で挑むまでです!!」

そういうと俺はまだ1発も撃っていないライフルのマガジンを無意味に入れ替えた

ガシャンっという音と共にマガジンが地面へと落ちた

## チャプター12・2「反撃開始：第3ラウンド」

「ええ、そうですとも、敵が軍隊ならこっちはゲリラ戦で挑むまでです」

奴らはたぶんあの陣形をくずさないだろう

それが軍隊ともなれば尚更だ

最初にランチャーを撃ってきたサイクロプスがそうである

目の前に何体のロボットの残骸があるうが

それは彼らの気にする所じゃない

自分の陣地内に敵が入ってきた、だから攻撃した

奴からしてみればただそれだけの事なのだ

詰まる所、ラウンド毎に02号機がやられないのも

そんな彼らの理念が原因なのではないだろうか

隊長機から連絡が入ってきた

「前に進めばいいのかな？」

「ええ、お願いします。一番最初にやられた地点のキューブまで移動しましょう」

俺が隊長機へと通信を返すと、隊長機が動きはじめた

キューブの上で少し助走をつけてジャンプする

空中2メートル、キューブの上なので7メートルの高さを隊長機が飛んでいく

人間では考えられない高さを前のキューブへとジャンプしていく

やがてキューブを渡りきった隊長機から連絡が入った

「どんどん、付いて来てね」

隊長の通信が終わると共に

俺たちは次々に前へと進んで行く

俺が隊長機の後ろに続くようにジャンプし

04号機が俺の後ろを付いてくる

04号機がジャンプする直前、03号機へと通信入れた

「03号機さんもついてきてな」

キューブの下で待機していた03号機の頭部が上下に振れる

それを確認したのだろう04号機が俺達が待機しているのキューブへとジャンプした

ピヨーン ガシャーン

見事に着地

5メートル四方のキューブ

通路の幅は約2メートル

サイクロプスのジャンプ力なら余裕でお釣りが返って来るレベルの跳躍である

さらに先ほどみたいにキューブの森を進突き進んでいくよりも

このキューブの上をジャンプして行く方がはるかにスピードがあり40メートル進むのにも数十秒しか時間がかからなかった

やがて敵の頭上を発見した隊長から通信が入ってくる

「01号機君、敵が居たよ！」

慌てて連絡を返す

「触らないでくださいね。気がつかれないように待機しててください」

04号機も会話へと参加する

「そつやな、またへまされても困るわ！」

隊長は少しスネた素振りをしてその場で待機したやがて隊長に追いついた俺たちは

微かだが、キューブの隙間から見える敵TSCの頭部を確認した距離からして15メートルそこそこ

銃器で慎重に狙えば、ほぼ確実に狙える距離だった

「どないする、いてまうか？」

04号機が敵に照準を合わせた状態で通信を入れる

そんな彼へ俺は静止するよう促した

「いや待ってください、まだ微かに見えている頭じゃ確実じゃないですよ」

確かに今の状態では不十分だ

第2ラウンド、目の前のTSCに頭を2発、それで俺達はやられてしまった

今回この状況で先制攻撃を外した場合、今度はまた先ほどみたいに一掃されてしまう可能性が高い

そんな事を考えていた時、俺たちの後を追う03号機が目に入った  
調度俺たちの真下のキューブで待機していた彼は何かの指示を待っている様子だった

俺はそんな03号機を見て通信を入れる

「彼、使えないですかね？」

「彼ってーと03号機か」

通信中も終始敵の位置を把握する、そんな時だ、頭の奥で閃きが走った

「03号機さん敵の後ろに回りこみましょうか」

「なるほど、陽動作戦か！」

こちら側からは敵の位置が簡単に把握できるのだから

03号機に指示を出して敵の背後に周り込ませる事も簡単にできるのだ

俺達の通信に答えるように03号機の頭部が上下に揺れるのが確認できた

どうやら陽動に参加してくれるという事らしい

俺は皆に作戦内容を話した後実行に移した

04号機が指示を出す

「03号機さん、そのキューブの角を左に進んでから次の角を右や」

03号機が慎重に動き出す

隊長の時とは大違いだ！！

とは言え慎重な動きから、不安が見て取れた

彼のソロソロとした動き、若干の足音はすれども

物凄い音を立てて走りだす事はしなかった

やがてキューブを挟んで敵と横に体直線状に並んだ時だろうか

敵が03号機の足音に気がついたらしい

カノン、カノンという音を頼りに徐々に動き始めた

03号機がいる通路へと敵が迫っていく

だが、それもすべて作戦の内、計算された事なのだ

今まで正面を向いていた敵が、他の通路を見に行く為に俺たちから背を向けたのだ

やがて徐々に進んで行く敵のTSC、徐々に敵を狙える範囲が増え  
て行く

そんな敵のTSCを見て隊長から通信が入ってくる

「今チャンスなんじゃない？」

確かに絶好のチャンスだ

先ほどまでは微かにしか見えなかった頭部が今は  
肩まではつきりと確認できる

やがて肩だけだったのが背中をも確認する事ができたのだ  
「やりますか」

その合図を待っていたかのように04号機が銃器を構える  
04号機につられる様に隊長も銃器を構えていた

最後に俺の射撃音と共に9発の弾丸が敵を貫いた

ダダダッ　ダダダッ　ダダダッ

撃ち抜かれた衝撃で敵がクシャッと倒れ込む

倒れこむ敵を見て隊長が小さくガッツポーズをした

「やったね、01号機君」

9発打ち込んではいったものの、3人合わせて命中したのはたったの3発だった

その中でも一発頭部に命中したのが大きかったらしい

射撃には参加していた隊長も結局の所、天井を撃っていたのだからもし、倒し切れなかった時は隊長を突き落として逃げる覚悟だった。

俺は敵を倒して浮かれている隊長へと通信を入れた

「隊長ガッツポーズってどうやるんですか」

「コマンド（C e r l）Gの後に左小指のボタンだよ」

隊長の通信内容通りコマンドを入力すると、俺のTSCはキューブの上でガッツポーズをした

さらに続くように04号機も隊長のマネをする

やがて03号機が俺達が居るキューブへと戻ってきた

これで人数だけでも数が揃ったのだ

みんなに通信を入れる

「次は左隅に居る敵兵ですね」

今現在倒した敵は初回俺達をランチャーで一掃し

さらには2ラウンド目に2人を4発の弾丸で静めた名手だ

皆が同じ兵装をしていたのなら、やはり彼がブルーチームの隊長だったのだろう

肩のTSCの番号で分かる、多分中身は変わっていないはずだ

04号機から連絡が入る

「やっと一人やゝ、マジきついわ」

俺が溜め息を付く間もなく、隊長が動き出す

ピヨーン ガシャーン ピヨーン ガシャーン

やがて先を進んでいた隊長が、また敵を発見したらしい  
隊長から通信が入る

「01号機君、敵いたよ」

「隊長タフですね、こっちはもうヘトヘトですよ」

「こういう時、女が一番タフなんだから」

隊長はいつもと変わらない口調で返事を返した

やがて隊長に追い付いた俺達も敵の兵士を確認したのだが  
少し様子がおかしい、先ほどの敵機と同じように待機はしてくれな  
い様子だ

もしかしたらジャンプの着地音を聞かれたのかもしれない  
敵兵が俺達のいる方向へと移動してくる

04号機から通信が入る

「それにしてもこのまま角曲がったら03号機と鉢合わせやないか  
？」

俺はその通信を聞くと03号機の方を見た  
確かにそうだ

03号機はキューブの森を移動しなきゃいけないため俺達よりも移  
動速度が遅い

そして今居るのは俺達の真下の通路  
曲がり角ばかり異様に存在する一本道だ

俺は慌てて03号機へと通信を居れた

「03号機さん、そっちに敵が来ています何所か他の通路に隠れて  
ください」

俺のあわてる口調の通信が03号機に届いたのだろう  
03号機の頭部が左右に動くのを確認する事が出来た  
何所か隠れるための通路を探しているのだろう  
キヨロキヨロと見回している

呑気に通路を探す03号機へ向けて04号機からも通信が入った  
「はよ隠れないか!!」

03号機の画面から敵機が見えたのだろっ、その微かな胴体を見て  
03号機は硬直した

そんな硬直する隊員めがけて隊長の激が飛ぶ  
「にげてーーーーー!!!!!!」

03号機はそんな隊長の叫び声に驚いたのだろっ  
今まで進んでいた方向から間逆へと方向転換すると勢い良く走りだ  
した

その足音を聞いて敵の兵士が一本道へと一気に姿を現すと  
03号機を追うようにして敵の足音が大きくなり更に勢いを増して  
いった

敵と03号機との距離は30メートルくらいあるだろっ  
俺と敵との距離はキューブ2つ分、約15メートルと言った所か  
見る見る距離が縮まっっていく

通信を出してる暇なんか全くとって良いほどなかった

15、10、5と勢い良く迫る敵兵の姿を見て

既に俺の体は答えを出していたのだろっ、思うよりも早く俺は行動  
を起こしていた

敵のサイクロプスは急に目の前に出てきた障害物に勢い良くぶつかり  
障害物に弾き飛ばされて進行方向とは間逆の方向に勢い良く倒れこむ

ガッシャーーーーーー

キューブから飛び降りた為に俺の目の前には敵がいる

そして俺も敵と同じ格好をしているのだろっ

演習場の天井をTSCが眺めていたために、天井に設置されている  
照明が良く見えた



飛び降りた分俺の方が起き上がるのに少し時間がかかるか

TSCが起き上がるのを待っていると

俺の頭上にいる04号機が無残に倒れ込んでいる敵へと射撃を入れた

ダダダッ　ダダダッ　ダダダッ

その援護射撃のおかげで倒れこんだ姿勢のまま敵は動かなくなった  
倒れ込む俺を心配そうに03号機が見守っている

やがて俺のTSCが起き上がると安心したのだろう03号機が俺の  
元へと戻ってきた

本来なら大丈夫ですかの一言でも欲しい所である

そんな事を考えていると03号機はまたキューブの天辺へと俺を持ち  
上げてくれた

全くもって親切な奴である

04号機から連絡が入る

「お手柄やったな」

「お帰り、大丈夫だったみたいね」

俺も皆へと返事を返す

「ええ、なんとか生きています、。。」

内心ハラハラ、ドキドキ物だ、もし援護射撃が入らなかったなら俺  
は多分そのままリタイアしていたはずなのだから、それよりも問題  
はこれから

ここまで倒した敵は2体、残りは敵の隊長も含めて3体これからが  
正念場だな

### チャプター12・3「反撃終了：第3ラウンド」

キューブの天辺に登って早々04号機から通信が入る

「お手柄やったな」

「お帰り、大丈夫だったみたいね、。」

「ええ、なんとか生きてますよ。04号機さんの援護がなかったら今頃やられてました」

俺の無事を確認して隊長がまた動きだす

ピヨーン ガシャーン ピヨーン ガシャーン

「あの人戦闘は苦手なわりに、移動ははいんやから」  
半ば呆れる調子で04号機が答えた

確かに、移動だけは早い

次の敵が何処にいるか分かっているのだろうか  
ああ、もう25メートルも進んでいる、。

25メートル先では隊長が辺りを見回していた

先ほど同様、敵を探しているみたいだ

今の状況、頭数なら現在こちらの方が有利だが、少し疑問が残る

先ほど俺は03号機を助ける為に上空から降り注ぐように落ちていた  
った

敵にぶつかって空を見るように仰向けの姿勢で倒れこんだ

それを04号機が射撃したにせよ、俺たちがキューブの上に登っている情報が少なからず  
流れているはずだ

俺は大慌てで隊長へと通信を入れる

「隊長、俺達がキューブの上に登ってるって事敵にばれてるかもしれません」

「えっ！ 何で？」

隊長から気の抜けた返事が返ってきた

そして通信の終わり際だろうか隊長の歯切れの悪い悲鳴と共に敵のライフルの射撃音がなった

「キャッ！？」

音に気が付き俺達の前方にいる隊長を見る、どうやら隊長機は無事なようだ

すぐさま、キューブ中央へ引っ込んだので直撃はしなかったらしい暫くして、04号機が隊長と同じキューブへとたどりついた  
そして俺も04号機に続くように正面にあるキューブへジャンプしようとした瞬間

地面から奇怪な音が鳴った

カチッ      ポーーーーー

グレネードランチャーの発射音だ！！

やがて上空に煙を噴いた丸い物体が姿をあらわし、俺達のはるか上空を過ぎ去っていった

その後ランチャー弾は、俺達の居る地点より大きく右の方へと流されまばゆい光と共に、消失した

俺はと言うと、煙を吹く丸い物体に驚き

足を踏み外して、また地面で横になっている

「ああ、また地面を見る羽目になるなんて」

微かに咳き項垂れる俺は、自分の機体が先ほど同様起き上がるのを待っていた

それに、してもタフな機械だ

人工筋肉を使ってるって言うってたっけ

5メートルの高さから二度も落ちたのに  
体力は減らないし（画面左下のゲージ）

ぶっ壊れないし、ロボット工学も進歩したものだな

TSCに関心している俺を尻目にまた奇怪な音が直ぐそばになった

カチツ      ポーーーーー

2発目のグレネードランチャー!!

どうやら敵さんは、キューブ上に居る隊長達へ射撃が届かないものだから

嫌気がさして、グレネードで一掃しようとしたらしい

だが、そのランチャー弾は無残にもまた右の方向へと大きく流されて行く

そして流されて行くグレネード弾は何所から撃っているのか俺の視界から良く見えた

音の鳴った場所で敵の居る位置も把握できる

多分俺の居る所の、左隅のキューブにある通路で敵機は上空を見上げているのだろう

やがて俺の居る所に03号機が到着した

足を踏み外して地面に落下する所を見ていたのだろうか

03号機が操縦するTSCの無表情さがやけに心に刺さるのを感じた

03号機が合流した事を確認して隊長達へと連絡を入れる

「どっから弾飛んできたか分かりますか？」

すぐさま04号機から通信が返って来る

「その隅っこやったと思うけど」

やはりそうだ、敵は左隅に居る

「ちよつと行ってきました、そこでジャンプでもして敵を引き付けておいてください、足踏みでもかまいません！」

「せやなー、ジャンプしとった方がおちよくつとる用にみえるわ」

「えっ！？敵さんを挑発しちゃうの」

暫く考え込む間があっただろうか

やがて隊長達が、キューブの天辺でジャンプし始めた

ドカ ドカという凄い音が敵の恐怖を誘う

急いで03号機へと通信を入れる

「03号機さん、その隅にいる敵を倒しますついて来てください」

俺は連絡を終えると既に走りだしていた

敵は今よほど混乱しているだろう

むしろ混乱していてくれないと困る

敵側も少しは固まって動いていたのなら、こんな状況にも対応できたのだろうけど

動き出した俺につられて03号機が俺の後をついてくる

左隅にあるキューブの通路へ飛び出した時

敵の青いサイクロプスは上空に向けて銃器を構えていた

俺達に気がついたのだろう、大慌てで地上組に照準を合わせようとする

だがもう既に遅かった

ダダダッ   ダダダッ   ダダダッ

ダダダッ   ダダダッ

弾丸の波は敵が銃器を構えるよりも一瞬早く通過し

やがて、敵のサイクロプスは地面へと倒れこむと、そこで動くのをやめた

ここまで3体倒すのに4分

このままいけば俺達の勝ちなのだろうか

かなりの労力を使った感じがした

自分が動かしているのは指だけなのに、この疲労感なんなのだろう

うか

そんな俺を尻目に隊長がまた動き出す

キューブの上なら幾分安全だと思ったのだろう

ピヨーン ガシャーン ピヨーン ガシャーン

次は右側へと隊長が移動しいて行く

やはり隊長の移動は早い

隊長は俺達を置き去りにしていち早く右隅のキューブへと移動して  
いた

そして地上を見回すそぶりをしたのち

隊長から通信が入る

「なんか敵さんやられちゃってるみたいだよ？」

俺は少しばかりの混乱を見せる隊長へと直ぐさま連絡を返した

「やられてるってどう言う事ですか？」

「敵さんが、動いてないの、倒れこんでるっていうのかな？」

気になった地上組みも敵の残骸を確認しに行く

ガシャーン、ガシャーンと大きな音を立てながら03号機と残骸まで競

争である

やがて隊長に言われた地点にとうちやくすると

そこには確かに壁に寄りかかって倒れ込む敵の青いTSCの姿があ  
った

「誰がやったんだろう？」

04号機も隊長と同じキューブへと到着する

「ほんにな、敵さんの無残な姿や」

敵残骸を見詰めながら辺りを見回すと、敵の背中の下あたりに  
白銀の丸い物体を確認する事ができた

俺はしばらく丸い物体を見つめていた  
そして見つめながら通信を入れる

「これって、ランチャー弾じゃないですかね？」

「なるほど、TKちゅう事か」

その発言に03号機と隊長は面を食らってる様子だった  
確認するように連絡を入れる

「チームキルですよ、簡単に言う仲間割れです」

俺の発言で隊長も先ほどの出来事を思い出したらしく  
通信が入って来る

「ああ、あの煙を噴いて飛んでいったやつね」

03号機は相変わらず頭部を上下に振っていた

キューブの上から攻めてくるとは思っていなかったのだろう  
敵は、慌てて頭上にいる敵に照準を合わせる羽目になったため  
冷静さを欠いたのだ

見方が左隅から撃ったランチャー弾は隊長達のはるか上空を飛んで  
行き

右隅に居る見方へと飛んで行った

そこでやがて発光したランチャー弾は見事に見方を包み込む  
不意に飛んで来た見方の一撃を回避する暇もなかった敵機は今無残  
な残骸となっている

「グレネードでチームキルって！　どんだけリアルに作られとんね  
ん！！」

「えっへん、凄いでしょ！」

04号機がすぐさま天狗になる隊長へと突っ込みを入れた

「えばんなや！！」

俺はそんな2人の姿を見て少し気が抜けていた

既に敵を4体倒した

残るは敵の隊長機だけで、ここからが問題だ  
やがて気を引き締め直した俺は皆へと通信を入れる

「あとは敵の隊長機だけです、スナイパーライフルを持っているので気を付けてください」

「厄介な奴が結局残ったんやな」

04号機はさらに続けた

「ちよつと確認してくるわ」

そう言うと04号機はすぐさま動きだした

いつもなら隊長が先に動くのだけど

今は銀色の弾をまだ見ているようだった

自分達を作った物に見とれているのだろうか

「あつ、ちよつと待って！」

俺の静止にお構いなく04号機は進んで行く

やがてブルーチームのスタート地点正面のキューブへと04号機がたどりついた

そして、そんな04号機を追うようにして俺達も移動する

「おるでー、敵さんの大将やー!!」

下を見回して敵リーダーの姿を確認したのだろう

04号機から通信が入ってきた

そして通信と同時にスナイパーライフルの乾いた重たい銃声が鳴る  
!!

タア――――ン――――

その銃声は第1ラウンド目で03号機を一瞬で沈めた音だ

敵リーダーのスナイパーライフルが火を噴いたのだろう

やがて画面の右隅に04号機がやられたという連絡表示が出現した

その表示と音に気が付き隊長機がやっと動き始めた

それと同時に04号機から通信が入る

「ぬあ――――、どくそが――――あああつ!!」



なり興奮気味の叫びだ

耳元では04号機の悲鳴が今もなお続いていた

「どうした？何があっただんだ」

「敵のライフルにやられたんや」

俺が04号機の状況説明に耳を傾けていた時だ

03号機が俺の脇を通過した

多分、ポジションを捕ろうとしたのだろう

キューブの隙間を移動して行く

「ちょ、おま今敵将映ったぞ！！」

03号機の画面を見ていたのだろう、04号機から通信が入った

03号機もそれに気が付き足を止めたがすでに時すでに遅そかった

向こう側は一瞬写りこんだ影めがけてスナイパーライフルを一撃

タア - - - - -

重たく乾いた弾丸の銃声がまた一発耳元を通過していく

敵のリーダーはかなりの名手なのだろうか

微かに見えただけの03号機の胴体を射抜いたのだ

全く外す気配を見せない

それでいてかなりこの囲まれた状況に全く動じていない

危険を感じ俺はすぐさま後退しようとした時

通路からレッドチームのスタート地点を一瞬自分の目で確認する事が出来た

それと同時に敵のリーダーの影が一瞬写りこむ

タア - - - - -

「ああ、終わった」

俺は狭い空間の中で小さく眩いた

やがて隊長の画面に俺達の機体番号が表示されただろう  
一瞬で3機倒され、気がつけば隊長は最後の兵員になっていた  
隊長に通信を入れる

「逃げてください、敵はかなりの強敵です」

沈みきった声で隊長に通信を入れる

「どうしたの？ 一体何があったの!？」

気がつけば3機やられたこの状況で隊長は混乱していた  
キューブの上であたふたしている様子だ

そんな隊長はというと、ブルーチーム右正面2つ奥のキューブに居る

そこで危険を感じ止まっているのだ  
たぶん女の感という奴なのだろう

そこから一步も動こうとしなかった  
幸な事にキューブの中心部分に居るため、 敵がキューブ上に登っ  
て来さえしなければ

隊長は敵にやられる事はないのだ

混乱する隊長から通信が入って来る

「どうしよう、どうしたらいいかな、多分勝てないよ」

隊長の困りきった声が敗者達へと通達された

当の俺はと言うと自分の試験が終了した事で脱力しきっていた  
隊長は未だ喚いている

そんな隊長のわめきを聞いて、ある事を思い出した  
マークスが始め説明していた特殊兵装の事である

確か隊長機の兵装は一般と違うんだっけ？

待てよ、隊長機ならグレネードがある

それがどんな形かは知らないにせよ  
多分持っている事は確かなのだろう

この時点で残り時間はわずか10秒を切っていた  
俺はすぐさま通信を入れた

「隊長、グレネード持ってますか？」

「えっ！？ 何それ」

隊長の返答は予想通りのものだった

時間がなくあせっていた俺は隊長へ雑な返事を返す

「右薬指のボタンを押して、トリガーです！！ 隊長の視点から1  
つ先のキューブの影に

敵がいるんです、そこめがけて投げて！！」

「急いで！！」「はよせんか！！」

隊長に俺達の最後の叫びが通じたかわわからない

やがて俺達の声に答えるように隊長の赤いサイクロプスは動きだした  
腰辺りから丸く銀色に輝くボールを出すと、正面へと投げつけていた  
そのボールはキューブ1個分飛んで行くと

地面へと吸い込まれるように落ちて行き、眩い光を放ちながら強烈  
に発光した

その発光を最後に、試合終了を告げるブザーが鳴り響く

そのブザー音と共に俺達の

激動の

適正試験が、今、終了したのだ

### チャプター13「我が心は戦場にあり」

ビーっというブザー音と共に隊長の視観だった画面が黒いブラックスクリーンへと変わった

俺はコクピットの中で大きな溜め息を付き

椅子に深く持たれ込む

ドサツという音が鳴る、椅子のクッションの間隔が今は心地よかったはたして試験は合格だったのだろうか

しばらくしてガチャっという音と共に

眩しい光源がコクピット内一面を照らし出した

そういえば第3ラウンドの勝負、どっちが勝ったのだろう

この試験では試合結果を通知するアナウンスが一度も流れないので2ラウンドまでは際どい勝負がなかったために試合結果はまるで気にならなかった

そんな事を考えていた時、技術者の「お疲れさまです」という言葉で現実の世界へと戻俺は戻って行く

俺はその声に思わず、コクピット内でフラフラと立って、外へ出ようとしたのだが

酷いプレッシャーと、張り詰めた緊張感に長時間さらされたためか上手く立ち上がる事ができなかった

その行動を見かねてか技術者がまた声を掛けてくる

「大丈夫ですか？手をかしましょう」

「ええ、すみません。お願いします」

俺は一言そういうと技術者に担がれて、やっとコクピット内から外へ出る事ができた

俺を外へと出し、仕事を終えたのだろう

技術者はスタスタ歩いて奥の方へと行ってしまった

奥には大層な計測機器が山のように積み込んである

装置の周りに自衛官が1人と技術者が3人なにやら話しているみた  
いだ

とりあえず辺りを見回して見る

黒い卵形のコクピットが15台、綺麗に並んでいる

最大対戦数15対15でもできるのだろうか？

俺が周りを注意深く観察していた時

他のコクピットの脇から2人の男が出て来て俺に声をかけてきた

その姿を見てある事を思い出す、そうだ！

一緒に闘っていた奴らだ！！

「よう、大将」

この声は！、エレベーターに乗る時に見た事がある

この関西風の喋り方。聞き覚えがあるぞ

04号機のパイロットだ！！

04号機のパイロットにつられての隣に居る男が俺へと挨拶をする

軽く頭を下げて「お疲れ様です」と一言の挨拶

雰囲気としてかなりの礼儀正しさを感じた

たぶん03号機のパイロットなのだろう、この男の声もやはり試合  
前から聞いた事があった

エレベーターに乗った時の話だ

試験に対して激しく動揺している奴が一人いた、その時は声が裏返  
っていたものの

良く聞いてみるとやはり同じ声なのだ

とりあえず挨拶を返す事とする

一通り挨拶を終えると

04号機のパイロットが喋りだした

「大将。名前なんていうねん？」

そつえば、さっきまで一緒に戦っていたのに

俺はその戦友の名前を全くといって知らない

オンラインゲームの世界なら、リアルの名前を知ることはいし別に知りたいたとも思わない

でも、今さっきやったアレはゲームと言えるのだろうか  
まあそんな事今考える事でもないのだが

暫くして自己紹介が始まった

04号機のパイロット

名前は川辺洋一（カワベ ヨウイチ）と言うらしい

彼の話だと、FPS経験者でちよくちよく遊んだ事があるのだと  
やたら状況把握が早かったのもその為だ

身長は高く、痩せ型の体形だ

顔は細く、鋭い目つきが印象的だ

その第一印象とは丸で間逆の大阪弁と

陽気さが回りの空気を一瞬で変えてしまう

03号機のパイロット

名前は萩原晃助（ハギワラ コウスケ）

彼は、FPS初心者だ

身長は俺ら3人の中で1番低く

多少天然パーマ気味の髪にメガネが印象的だ

さらにこの考察が必要かどうかは分からないが  
今回のこの演習はドキドキハラハラ物だったという

彼は状況に対する飲み込みが早く

演習最後の終局間際には既に銃器の射撃が3人の中で一番上達していた

トラックボールでの操作は初心者の方に多少歩があるようだ

やがて、話が盛り上がりかけた時である

奥で話し込んでいた自衛官が俺達へと声を掛けてきた

自衛官が発言する

「君達、お疲れ様でした」

自衛官は一拍の間を挟んで続けた

「君達の試験結果は後ほど通達する事とする、施設内の宿泊施設で待機しているように」

ああ、やっぱり家には帰れないのか

そんな事を考えていた時だ

俺の脇に居た川辺が自衛官へと突っかかっていた

「おい！　どういうこっちゃねん。今の試験わいらの方がエライ不利やったやないか！！」

川辺は感情の気腹が激しいタイプなのだろう

さつきまで、隣で喜作に話していたのに

今は顔を真赤にして自衛官に突っかかっている

「2号機のパイロットの事もそうや、あいつは何処へいったっちゅうねん」

確かにそうだ、終わった直後は疲労からか、全く気にはならなかったし

初めから4人で戦っていたのだから今さら2号機のパイロットが出てきても対応に困る

そして今川辺はこの試験の疑問、理不尽さを自衛官にぶつけているのだ

暫く川辺の言い分を聞いていた自衛官がその重い口を開いた

「この適正試験は機械に対する適正を判断するものであり、試合に勝つことが目的ではない。

君達は私見だが、良く戦ったと私は判断している」

その言葉と共に重い空気が辺り一面に立ち込め  
また自衛官が口を開いた

「だが、大変残念な事に、君達の行動を台無しにする輩が居た。  
彼は今別室で明日来るであろう移送車を待っている所だ。君達も試験に落ちれば同じ道を歩む事になるだろう」

その言葉で周りが凍りつく、先ほどまで熱かった空気が一瞬で冷めていったのを感じた

そして川辺の顔から血の気が引いていくのが見て取れた

詰まる所をいうと、試験に参加しなかった02号機のパイロットはラウンド1終了時点で適正無しと判断されたのだろう

コクピットから排出された後、拘束されて

明日別の駐屯地へと移送されるのだという。

もし俺達の中で誰かが適正無しとされたら、02号機のパイロット同様

別の駐屯地へと移送されるのだろうか？

そうなった場合どうなるだ、。。

本当に戦争なんて事になってしまったら

前線送り！！

もし前線に立つ事になってしまったら本当に生身で戦わなければいけないのだろうか



既に皆逆らう氣力を無くしていた

そんな俺達に追い討ちをかけるように一言

「今回君達の発言は報告しないものとする、不祥の事態もあった特別に大目にみよう」

自衛官が良い人で良かった

ほっと、肩を撫で下ろした時だ

演習施設の扉が開いて、2人の自衛官が中へと入ってきた

彼らは俺達を施設内の宿泊所へと案内する役目らしい

この施設内で一体どれだけの数の自衛官が働いているのだろうか少し疑問になった

2人の自衛官に連れられて、俺達は宿泊所へと案内される

案内される途中疑問に思っている事が1つだけ残っていたので萩原に聞く事にした

「なんで、無線連絡使わなかったの？」

川辺が割り込んでくる

「そうや、みんな、連絡とりあってたんに、あんさんだけなんで使わなかったんや？」

萩原は疑問そうな顔を浮かべている

そして答えが返ってきた

「逆に聞きたいです、どうやって連絡してたんです？」

なんともいえない返事が返ってきた

そしてさらに続ける

「ほら、説明とかもちゃんと流れなかったし、皆さんどうやって気がついたんですか？」

そういわれて見ると確かにそうだ高島がそこまで詳しい説明をした

かという疑問である

それに彼も緊張していたのだ、そんな状況下で必要最小限以外の事に手を出す人間はそういない

実際、俺もそうだ

事前に渡された資料が無ければ、無線連絡を使わなかったと思うそれに右手の説明は延々と射撃説明だけだったし、。。。

「でもさ、資料とかあったじゃん、あれに結構詳しく書いてなかったっけ？」

俺はそう言つと、萩原の顔を見た

案の定、萩原の目が泳いでいるのが確認できた書いてあつたけど、見なかったの？」

そして沈んだ表情のまま、萩原は喋りはじめる

「ああ、資料に全部書いてあつたんですね」

「そうや、資料どないしたふや」

川辺がすぐさまつつこみを入れた

「えつと、あの、ホールにあるんです、座つてた席の上に置いてあるんですよ」

どうやら急に自分が呼ばれたので慌てて出て来たらしく資料はバイプ椅子の上に置き忘れたらしいのだ

そして試験が急に始まつてしまったもので特に対応も出来ずにあんな無音君になつてしまったというその光景を見て川辺は大笑いをしていた

やがて俺達は宿泊所へと案内された

宿泊所は各2名1組の2人部屋で

思い描いていたイメージより遥に良かった

個室は番号順に振り分けられていて

1→2 3→4で分かれている

つまるところ、02号機がないので俺は2人部屋を1人で使う羽目になった

簡単な挨拶をして川辺、萩原と別れて部屋へと入る

無駄に広すぎる部屋だ

その部屋に入った時、妙な寂しさに襲われた

普段から一人暮らしをしていたというのに

こんな状況で一人になると、ここまで寂しいものなのかと思った

そんな俺の寂しさを紛らわすように

部屋の隅っこにはテレビが一台置かれていた

テレビの電源をつけて無作為にチャンネルを回す

ザーザーという音だけがテレビから流れ続けていた

他のチャンネルへと切り替えてみると、やはり砂嵐だ

全てのチャンネルを試して見たのだが砂嵐しが永遠と続いてた

「なんだ、こんちきしょう!!」

バチンとテレビを叩くと

ふてくされて部屋のベットに横になると

急な眠気が俺を襲う

完全な眠りに入る前に少し考え事をしていたと思う

もし、あのロボットで俺が戦場に行く事になったのなら

俺の心は何処にあるのだろうか

はたして俺は戦場にいる事になるのだろうか？

戦場では不死身と言って良いくらい頑丈なロボットがライフルを片手に動き回り

発見した敵を次々と銃撃して行く

考えただけでも恐ろしい兵器だ、。

こんな兵器を造って何をしでかすつもりなのだろう、。

## チャプター14-1「採用通知」

心地良い眠気を裂くような、扉を叩くノック音で目が覚めた俺は一体どれだけの時間眠っていたのだろうか  
分からない

窓1つないこの室内で時間の感覚は既に奪われていた  
まだ一日もたつてないのだろうか

ドン ドン ドン

「俺や、川辺や!!」

扉の向こうに居るのは川辺だ

一体なんの要なのだろうか

まあ、このまま眠る理由も無いし、暇だし、起きるか!

そして、俺は扉のドアを開ける事にした

扉の向こうでは、先ほどまで一緒に戦っていた中間が居た  
その横に自衛官が一人立っている、また見ない顔だ

自衛官が喋りだす

「正道真一、高島チーフが呼びだ。ついて来い」

そう一言告げると、自衛官は俺の正面から向きを変え  
スタスタと廊下を歩いて行った

それを追うように、川辺、萩原が後をつける  
一体全体何事だろうか

去り際だった、川辺が俺に向かって言った

「なにぼさつと立つとんねん、はよ行くで」

川辺より一足先に自衛官を追う萩原から声が掛かる

「みなさん、先いきますよ」  
間の抜けた声だ

事態の飲み込めない俺は採り合えずついて行く事にした

「ああ、ごめん。すぐ行くよ」

そういつて靴を履き、彼らの後を追う

自衛官の後ろを歩きながら俺は聞いた

「なあ、一体何事なんだい？いきなり呼び出された、これから何があるっていうんだ？」

俺の質問に川辺が答える

「さあな、俺かて詳しい事は分からのや、多分採用通告やとは思うけど」

その発言に繋げるようにして萩原がいう

「ええ、もしかしたら不採用通告かも知れませんがね」

その発言を聞いて川辺が萩原の首に腕を回し

軽くチョークスリーパーを決めた

萩原が絶えかねて、首に回っている川辺の腕をパン、パンと3回叩いた

たぶん腕をたたくのはギブアップって事なのだろう

そして川部が萩原の首から腕を放した頃だろう

やたら長い廊下を進んでいた、俺達は施設内の応接室らしき場所へ

と案内された

自衛官が扉をノックをする

「失礼します、正道、萩原、川辺、以下三名をお連れしました」

自衛官の言葉を聞いて扉の向こうから声が聞こえた

「ごくろう、入れ」

自衛官は扉を開け、俺達を中へと案内した

そしてその声に誘われるように中へと入る俺達

自衛官は腕を直角にまげ水平に掌を額に付けると敬礼して一言挨拶を継げ、外へと出て行ったしまった

俺達の目の前には3人の男女がいる

やがてソファアへ案内され腰を掛けると

2人の男性は俺ら同様反対側にある細長のソファアへと座っていたその隣にいた女性がいたが座る事はなかった、立っているのが好きなのだろうか？

この2人は知っている

ホールの壇上で見た顔、そして演習場で聞いた声だがもう一人の女性はわからない、誰だろう

髪は肩にかかる位の短めで

顔には細めのメガネをかけている

白衣を着ていてもわかるくらいスレンダーな体格で

童顔だが年齢は20代後半といった所だろう

多分俺よりは年上だと思う

仄かに香る甘い香りの香水が花を刺激し少し心地よかった

隣の男同様白衣を着ているという事は多分科学者なのだろう

そんな事を考えているとマーキスの挨拶で話が始まった

「諸君、先ほどの試験はご苦労」

マーキスの威圧的な声が俺達に押し掛かる

「良い、データが取れたよ。まさか我々の部隊があそこまでやられるとはね」

そう言うと思ひげな笑みを見せた

マーキスの笑みがどう言う意味だったかわからないが米軍側はあれでもちゃんとした軍事演習だったのだろうでも、こちら側からして見ればいい迷惑だし

どう転んでも家に帰れないというのはかなり鬱な話だ  
なら、なるべく命が掛らない方を選ぶしかない

俺は心の中でそう考えると

マーキスの笑いが止んだのを見計らって、話かける事にした

「えっと、俺達は何故ここに呼び出されたんですか？」

そう言つて、マーキスの顔を見つめる

マーキスの目が急に鋭くなるのが見て取れた

やはりこの軍人怖い！！

それに本来なら俺の発言の後に川辺がデシャバって来てもおかしくないのに

俺の横の2人はやけに静かだ

少しして、俺を鬼の眼で睨んでいたマーキスの口が開いた

「ふめ、確かにそうだ、日本人は前振りが嫌いに見える。だが、前振りもせず唐突に本題を話しても良いものだろうか？」

そんな言葉を吐いて、マーキスが隣の高島を見た

いや、目で合図をしたと言つて良いだろう

その合図を受け取つて高島が喋りだす

「良いんだよマーキス、彼らはよっぽど試験の結果が気になると見える。私達が呼び出した理由が他の事だとも知らずにね」

高島のその発言に面を食らう3人

えっ！？違つのかよ、、。

まるで心の中を覗かれているみたいだった

「君達に可否を通達する前にまず片付けておく問題があつてね」

うん、この空気、かなり不味い



そして、その重たい空気に圧倒され俺は軽く下を向いた

「今回の演習プログラムには君達の奇怪な行動が組み込まれてはいなかったからね」

高島のその発言でようやく呼び出された理由が見えてきた

俺達のゲリラ戦、特殊コマンドを使って戦った事が裏目に出たのか  
もしれない

「それでだね、君達の採った行動をプラスにするかマイナスにする  
かを先ほどマークスと話したんだ」

頭の中身がグルグルと回っている

そして高島の話している内用の半分も理解できていない自分がその  
に居た

横の2人も同じ気持ちなのだろうか

俺はこういう場面に弱い

プレッシャーに弱い体質というか

更に追い打ちをかけるかのように今度はソファーにもたれかかる、  
高島の目が鋭くなった

「それでだね、君達の作戦。特殊プログラムに気がついた事はプラ  
スに採点する事にしたよ」

なにっ！！ アレで良かったのかよ

内心凄いビビっていた

そして高島のその言葉を聞いて一気にぼやけていた視界が開けた

ああ、あれで良かったんだ

俺は心の中で何度も咳くと

ほっと胸を撫で下ろした

ホットしているのは他の2人も一緒だろう

肩の力が一気に抜けた

「その結果だがね、この中から既に2人採用は決定しているのだが  
ね」

高島の一言で言葉を失った

つまり1人は不採用って事になるのか  
本題ってそういう事だったの？

若干の和やかムードが一瞬で険悪になる

口籠る高島に替わりマークスが喋り始めた

「諸君は良く戦った、作戦は真に素晴らしいものだった、だからと  
いってそこまでの採用枠があるわけではない。残念ながらこの中の  
1人は適正無しと判断せざる負えなかった」

断定的なマークスの言葉が矢のように突き刺さった  
できるのなら全員採用して欲しいものなのに

前線に行く奴を尻目に喜ぶ事なんて誰が出来るんだ

いよいよマークスがその不採用を告げるようだ

「萩原晃介といったかね、君の名前は」

そういつてマークスは鋭い目で萩原を見つめた

凍るように固まる萩原

「ふめ、何も言わなくてもいい。君は試験中もそうだったね、音信  
不通はチームを危険に晒すだけではない、、、。」

そう言いかけた時だった

川辺が何時も通りの威勢で話に割り込んでくる

「そやけど、萩原のやつがおらんかったら、ワイら全員やられとっ  
たわ!!」

レイブンの目が萩原から川辺へと移動する

一触即発とはこの事をいうのだろう

一般人と軍人では勝負は目に見えている

仕方なく俺も萩原の弁解に参加する事になった

とうの本人はと言うと今も固まったままだ

「俺も、川辺さんの意見に同感です。萩原さんは喋りはしなかった  
ものの、作戦に対して大きく貢献したのは事実です」

俺は一拍の間の後に続けるようにして言った

「それに萩原さんが通信に参加出来なかったのも、そちら側の説明不足が問題なのでは？」

こんな事をしても無駄なのかもしれない

でもできればチームを採用して欲しいものだ

「だが、君は試合中に他の仲間へ連絡をとる事ができたではないか」  
もつともな意見が帰ってきた

その意見に付け加えるようにして高島がいう

「情報を読み取るのも試験の課題の1つでね」

無茶苦茶な話だ

その言葉で始めてこの試験の門の狭さを痛感した

俺達はアッパー採点されているから良い

FPSだって経験者だ

そんな俺達だって瞬殺される状況なのに

他の連中がどれくらい戦えたかなんて目に見えてるじゃないか

## チャプター14-2「採用通知」

暫くの沈黙が流れた

部屋の空気はとても重く

今も直、マーキスは鋭い目つきで俺達を睨みつけていた

そんな重い空気を断ち切るように

今までずっと沈黙を守っていた白衣の女性が喋りだす

「マーキス中将、報告し忘れていた事があるのですが」

一瞬煙たそうな顔をしたマーキスはその報告を聞く事にしたらしく  
女性の方を向き、鋭い眼光を飛ばすと言った

「なんだ？」

マーキスは今更という感じだろう

顔を少し顰めて女性の話を聞いている

「萩原品介が不採用になった理由に、会話に参加しなかったという  
原因を挙げるのなら考えを改めるべきだと思います」

女性の言葉を聞いて一同が一斉に女性の顔を見つめていた

マーキスが顔に疑問の色を浮かべながらその女性へと言い返す

「どういう事だね？」

動揺しているマーキスに今だとはかりに女性は畳み掛けた

「えつとですね、先ほどわかった事なのですが、通信ボタンが壊れ  
ていたんです。03号機が音信普通になったのもその為だと思うん  
ですね、エラーがあつたというか、。」

正直なぜこの女性がそんな事を言うのか疑問に思った

俺達は試験終了後に萩原が音信不通にしていた理由を確認済みだし  
今この時点で女性が俺達をかばうメリットがまるでわからない

マーキスはなんだ、そんな事かという感じに顔を表情を戻すと言った

「私は技術者からそんな報告は受けていない」

そして、少しばかりか勝ち誇った表情をした  
だがそんな表情を崩すかのように今まで静観していた高島が話に割  
り込んで来る

というよりは自分の部下の発言にフォーローをしようとしている感  
じだ

「私は報告を受けているよ、君も聞いているものだと思っていたの  
だがね」

「なんだと、しれは本当か高島!？」

高島の意外な発言に、今度はマークスから驚きの声が上がった

「ああ、それに私の助手が言うのだから間違いないよ。私が彼女に  
調べるように言った事だし」

仲間から背中を刺され、急にマークスはアタフタし始めた

何がなんだか、分からないのは俺達も同じだ

暫く考え込んだ後、頭の整理がついたのだろう

マークスが喋りだす

「だが、それでは通信したかどうかは分からないではないか。仮に  
連絡機能を使っていなかったかもしれないだろ？」

マークスはそう言い終えると、高島へと視線をやった

自分の発言に対しての答えを聞きたいといった感じだろうか

だが、当の高島はというとマークスの視線には気付いていたものの  
視線を返さずに、常に一点

萩原をじつと見つめていた

どうやら萩原の意見を聞きたいらしい

だが、萩原はというと、ずっと俯いていてじつと話の行方を見守っ  
ている

その視線に気がついた俺は隣に居る萩原を肘で少し叩いた

やがて顔を上げて前方の視線に驚くと萩原は、その合図を読み取っ

たらしく、やつと重い口を開いた

「あの、僕、右手小指のボタンを押したんですけど反応が全くなくて」

萩原の一言はマークスへとトドメを刺した

高島の意見も待たずマークスは凍りついていた

今やマークス一人が道化人と化している

助手からまた声があがる

「無線を使えない状況下で仲間への通信方法を見つけ出した彼のポテンシャルは素晴らしいと私は思うのですが」

その言葉が決めてと言っていていいだろう

萩原は無線以外の連絡方法を確かに見つけており

戦闘中に首を縦に振ったりする事で気がつかないうちに指示を受け取っていた事を知ら

せていたのだから、あの女性の言う事には正しいものがあつた

やがてマークスが顔を上げると仕方ないと言った具合に

採用通知を3枚奥から取り出して、俺達へと手渡した

その通知を受け取ると俺達は重たい空気の流れる

応接室を後にする事にした

一礼してやがて廊下へとでる

マークスの話では、後ほど集会らしいものがあるので参加するようにとの事だったけど

また自衛官が呼びにくるのかな？

長い廊下を半分くらい進んだ時だろうか

川辺が喋りだした

「いや、一時はどうなるものかと思っただわ、結局3人採用になったのはいいものの。あのネーちゃんはいったいなんやったんやろか？。」

確かに川辺のいう通りだ、あの状況で上官に楯突く事であの女性になんのメリットがあったのだろう

それは俺達も同じ話だ、萩原の事を変に弁解したせいで不採用になっ  
ていてもおかしくないのだ

そんな中自分の身を呈して弁解するほどの義理が彼女にあったの  
だろうか？

それにしてもあの助手の声どっかで聞いた事があるような

そんな疑問が萩原の一言で吹き飛んだ

「あの人、隊長と同じ声してませんでしたか？」

「そうだ、隊長だ！！」

思わず叫んでいた

川辺も驚きの顔を隠せない様子だ

「それに、隊長、実際は運営責任者の助手をやってるって言ってま  
したよね」

マークスの影に隠れてはいるが、多分施設内ではレイブンより強い  
権力を高島は持っているのだろう

それなら辻褃があう

作戦で俺達の足を引っ張ったせめてもの償いだっただろうか  
隊長は萩原の為に嘘をついたのだ

「あの隊長も良い所あるんやけ、見直したで」

やがて自分の部屋についた俺達はまた暫く待機する事になった

## チャプター15「入隊」

気が付けば暫くという時間ではなくなっていた  
採用通知を貰ってから既に3日の月日が流れている

何で時間の感覚もないのにそんな事が分かって？  
それは、時計があるからだよ

まったく拷問だ！！

せめてテレビがまともに映ればいいのに、。

この暇な状況で川辺や萩原がタマに遊びに来てくれたけど  
話のネタなんて1日目で枯れてしまったさ

更に2日後

やっと自衛官が俺達を呼びに来た

廊下に出て、自衛官に連れられるが間々にホールへと案内された  
俺の後ろには30人前後と言った所だろうか

ぞろぞろと蟻の行進だ

だがその中に川辺、萩原の姿はなく  
先に案内されたとみえる

ホールへと足を踏み入れた俺を待っていたかのように川辺の大阪弁  
が俺へと発せられた

「よう大将、ここや、ここ」

そういわれ俺は川辺の隣の席へと座る事となった  
萩原も先に来ていたらしく、川辺の隣に姿を確認できる



「あつ、最後の組だったんですね。遅いから心配しちゃいました、また寝坊したかと思いましたよ」  
そうか、俺が最後だったのか

そう思いザツとホール内を見回した

ホール内は全然ガラガラで

招集時には1万以上いた学生の姿はそこにはなく  
試験通過者だけが、今そこへ座っている

人数は大体500人と言ったと所  
少数だが女性の姿も見受けられた

やがて軽快な足音と共に2人の責任者が壇上へと姿を現した  
そして演台でマーキスが招集時と変わらぬ演説を始めた

皆はそれを食い入るようにじつと見つめ

マーキスは壇上で軍の規則を新規入隊者へと通達する

この演説が終われば俺達は軍の一員となりこの施設内で当分暮すの  
だろう

まあ、今はこれが一番最善の選択なのだろう

やがてマーキスの演説が終了した

今度は拳銃を使う必要がなかったみたいだ

サイクロプス 一章（我が心は戦場にある）

完

裏話に続く

## 裏話1「勝負の行方」

### 裏話1（勝負の行方）

施設内には良く整備された裏庭が存在する、さらに短い距離だが林道も完備されており

照明は時間毎に明るさが変わるように設定されているため地下とは思えない空気を味わう事もできるのだ

そんな千度のベンチにアフロとリーゼントがもたれ掛るように座っていた

そして、かなり疲れている様子でリーゼントがアフロへと話かける「流石に歳をとると疲れやすくなるもので」

「そうですか、私はまだ全然いけますよ」

「それにしても、まさか空砲にあそこまでの威力があるとはね」

「一発でしたな、高島さん、ホール中の学生が一瞬で黙り込む姿は滑稽で」

そう言うともーキスは少し笑った

「それよりも、モーキス、今回の賭けは私の勝ちだな」

どうやら高島とモーキスは賭けをしていたらしい

演習の試合で一度でも鈴木助手が米軍演習生を負かす事があつたら高島の勝ち

演習生が完封したらモーキスの勝ちといった具合な勝負だ

少しの高笑いの後モーキスが話し出した

「いやいや、甘いよ高島、今回の勝負は私の勝ちだ」

「何を言っているんだ？」

疑問の色を浮かべる高島

「彼らはキューブの上に登っていたではないか、あんなの認められんよ」

「ほほう、先ほど応接室での出来事を君はお忘れているようで」

「あの一戦を踏まえても私の勝ちだ」

「マークスが続ける」

「ミハエルの機体はグレネードの閃光を浴びたにせよ、KOまではいたらなかったではないか――！」

今度は高島がにやける

「マークス、君は大事な事を忘れているみたいだね。今回の勝負はデスマッチだ、鈴木君のチームの残機は2体に対して君のチームは1体しか残っていないかではないか」

「マークスの表情がハツとする」

「02号機か――！」

「そうだよ、あの機体は動きはしなかったものの戦闘には参加していたからね」

高島続けていった

「攻めない戦法が仇になったね」

「まさか、この私が賭けに負けるとは、ゝゝ。」

「さて、次のランチは著ってもらうよ、そういう賭けだったからね」

高島がそんな事をいった時だろうか

携帯のコール音が横の男から聞こえた

「ああ、私だ」

「なんだと、わかった」

「ああ、スグそちらにむかう事にする」

携帯の電話を終えるとマークスが申し訳無さそうな顔をして

高島へと言った

「著るのは少し御預けになった」

「マークスが続ける」

「今ミハエルから連絡があつてね、国防長官が御呼びらしい、私は今から祖国に戻る事にするよ」

そつ一言高島に告げると、マーキス中將は足早にアメリカへ帰還する事になった

施設内の中庭にはアフロが一人、ベンチに腰をかけている

「はうあつ、逃げられたか、ゝ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4068d/>

---

サイクロプス

2010年10月10日10時23分発行